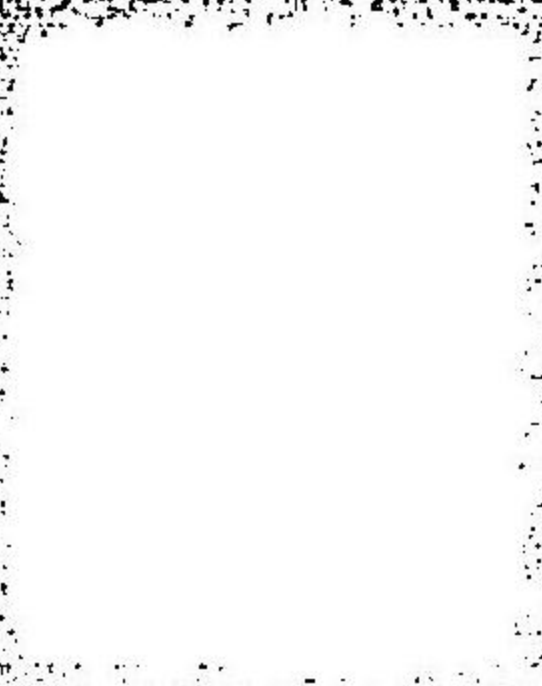
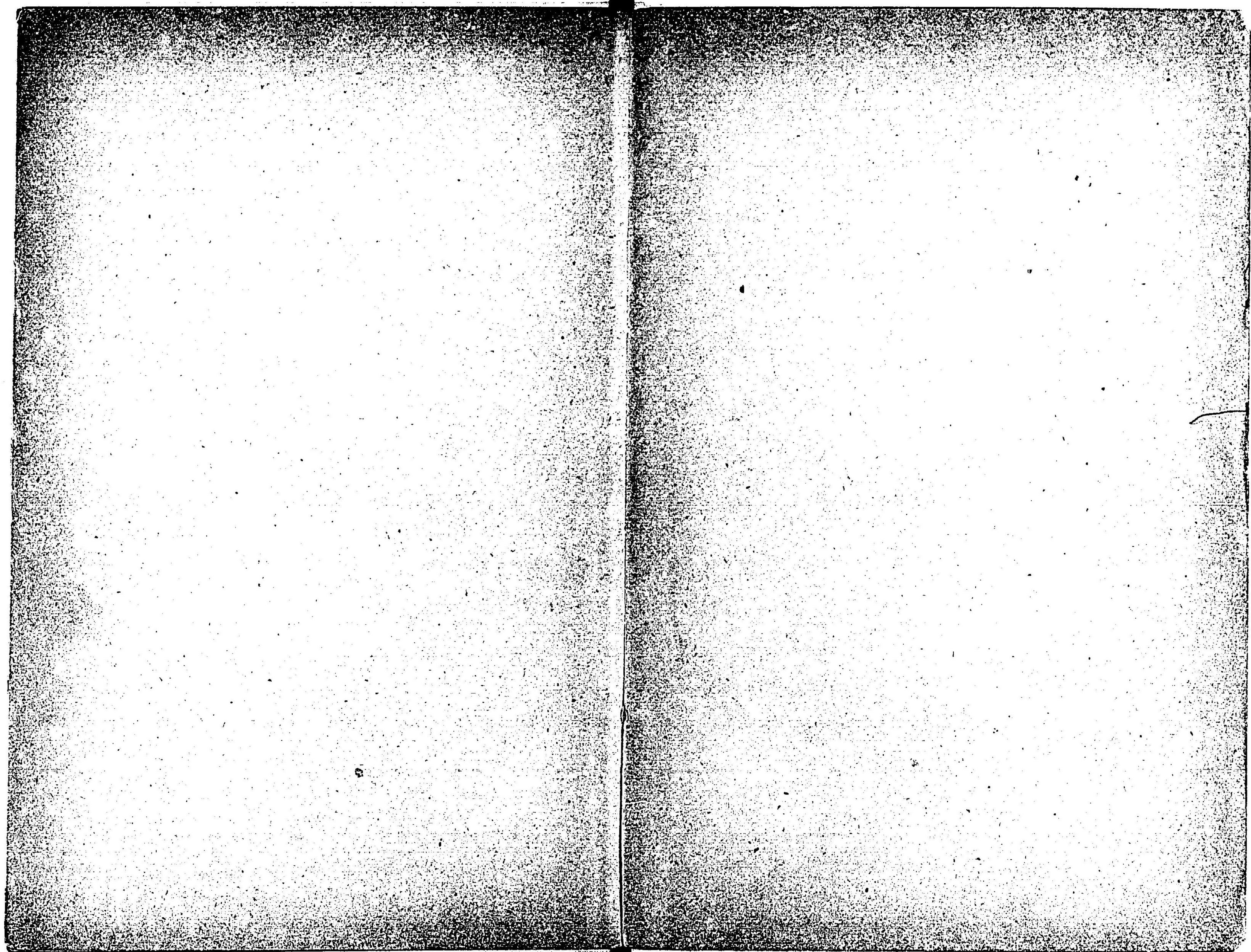
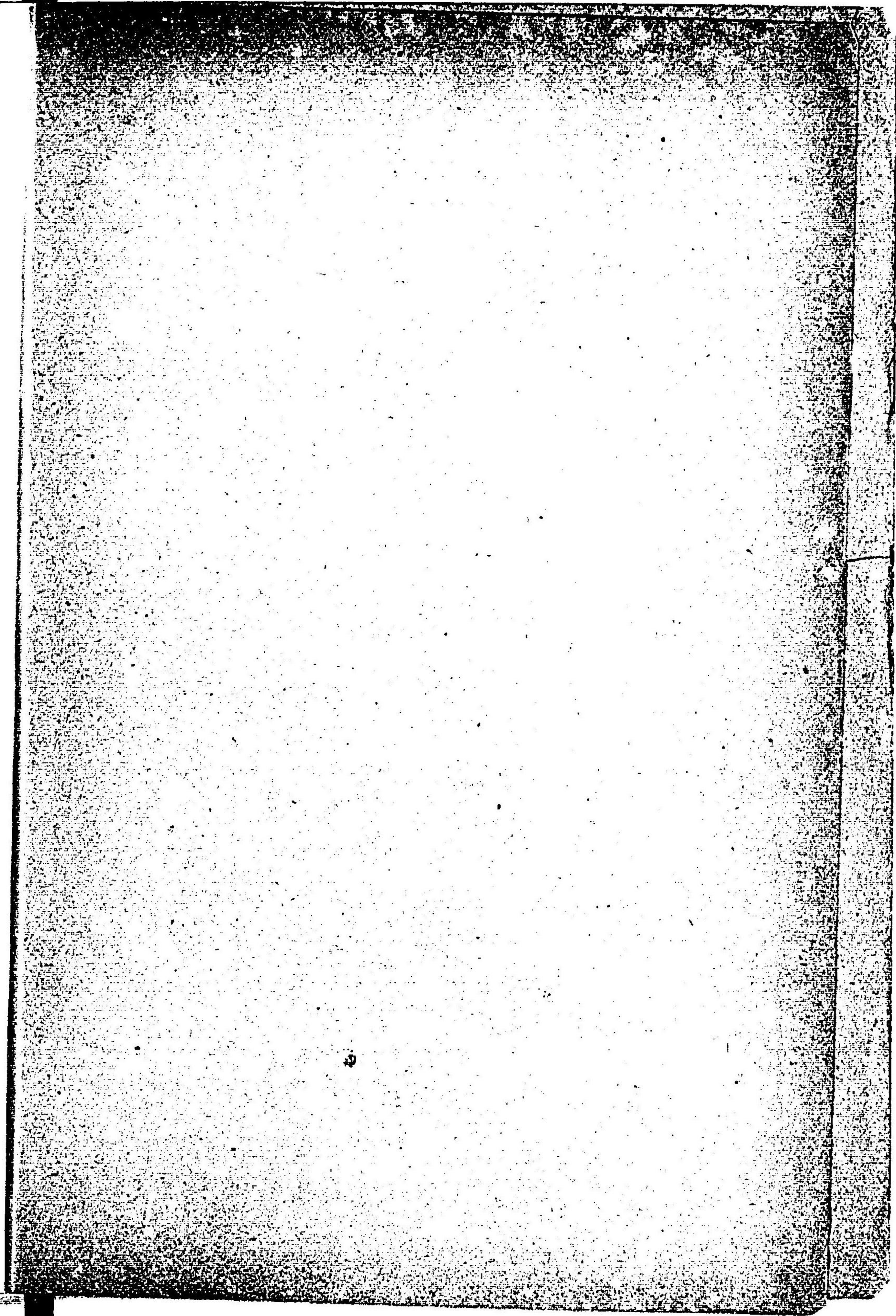


女

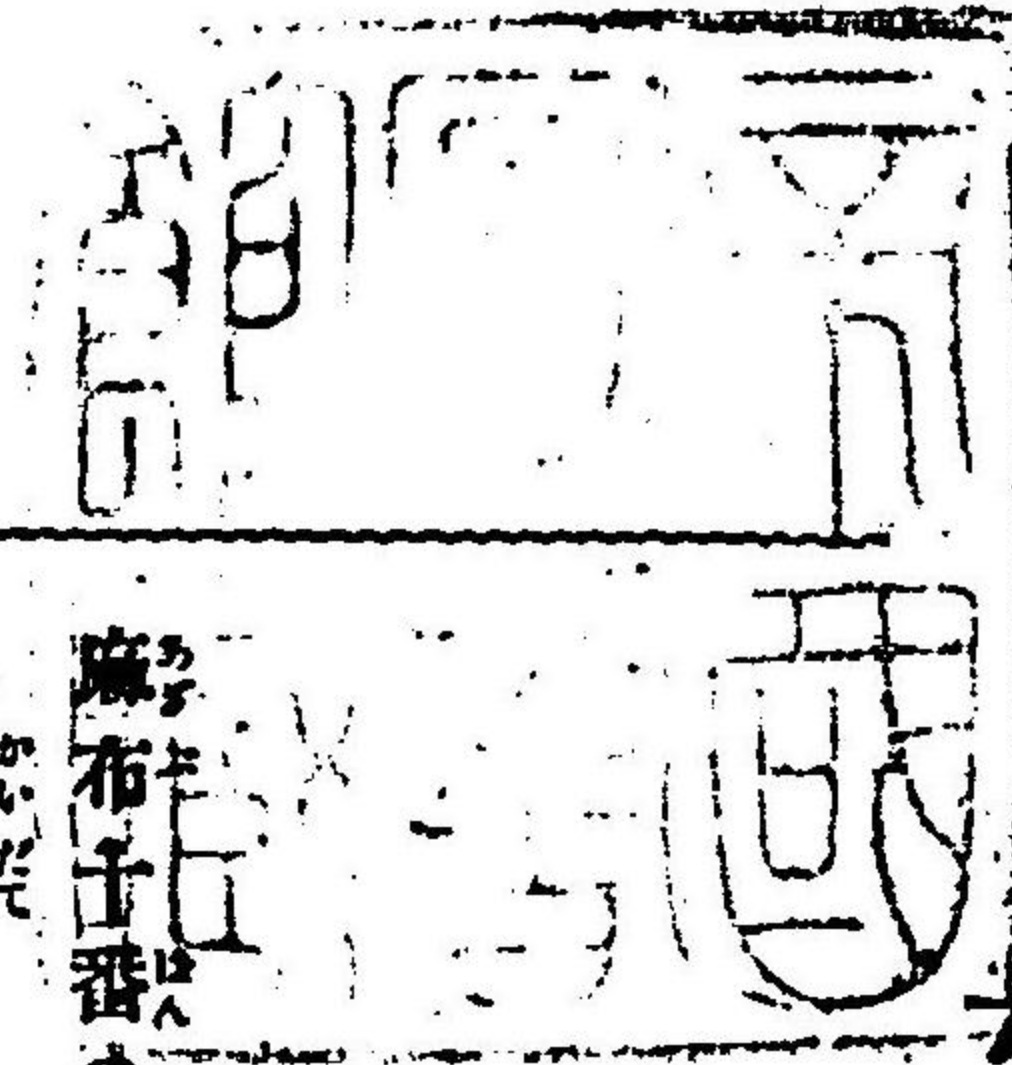
女  
子  
名  
谷  
生  
七







特  
836



女

(一)

麻布十番の通を右に折れて、櫻田町の高臺へ登る坂手前の少し引込んだ處に、二階建てで二軒続きの新らしい家がある、其右手に住む久山と云ふ家の二階を借りて、近頃自炊を始め出した三人の學生、一人は麻布獸醫學校、一人は芝の慈恵院醫學校、も一人は三田の慶應義塾と、各自學ぶ所は違つて居るが、孰れも島根縣出身で、是迄親しく交際して居た處から、不圖三人合同して自炊しやうではないかと云ふ話が持上り、學生の氣輕さは宜からう遣つて見やうと、相談言下に一決して、成るべく三人の通學に便利の場所と、手を分けて搜した結果

小 小  
川 栗  
黙 風  
水 葉  
合 作



此の久山の二階を借りることになった。

二

炊事は當番を極めて一週間に交代、今日からは獸醫須田の順番とあつて、偶の日曜を心安く朝寐も出來ず、眼の玉が熔けさうに寐そべつた二人を二階に殘し、朝飯の用意に約小半時を費やして、聽て二階へ來て見ると、二人は何時か眼を覺して何か互に語りながら、中々起るやうな氣色もない。

「おい、もう十一時になるよ、宜い加減に起き給へ」

須田は縁の脱れた火鉢に懸けた土瓶を下し、冷え切つた兩手を火の上に翳しながら、腹立たしさうに二人の方を凝と眺める。

「十一時！もう那樣かなア」と、醫學生の茅野は夜具の襟から、ヒョッコリ首を出すと、憐寸を摺つて枕頭にあつた巻蓑を喫しながら、

「おい土井、徐々起きやうか」

寢返打つて茅野の方を向いた土井は、暢びりと欠呻をして、

「まだ早い、折角の日曜だ、も少し寐なくつちや價はないよ」

「然し十一時だせ」と茅野。

「全くだ飯の仕度も全然出來ちやつたのだ、何ぼ日曜だからつて、宜い加減に起きて呉れなきやア、當番の僕が困るぢやないか。」

須田が愚痴らしく言ふ。

「ハ、あ今日から君の番だつたね、大きに御愁傷様、此次の日曜は僕の番だから、まあ今日だけは緩り寢かして置いて呉れ給へ」

土井は、又してもスツポリ夜具を被ぶる。

「可い加減に起きやう。」此時漸く起上つた茅野は、夜着の上に掛けてある着物を取るより早く寢衣と着換へ、

「土井、全くだ宜い加減に起き給へ」

「ツム、起る、起る、どツこいしよ。」と、土井は蒲團の裡から叫んだが、中々起きさうな様子もない。

須田と茅野は互に顔を見合せる。と、須田は急に何か思ひ出したらしく、

三

「僕は先刻裏口で索的なものを見附けたせ」

「何だい？」と、茅野は目を圓くする、

「これさ」と、須田は小指を出して、「傑作以上だね！」

「隣のか？」

「……」頷く。

「ほう、然うか、何うも聲を聞いた丈で何だか恍りするやうな気が爲たよ、僕は。」

「何だい、隣……のか？」土井が行成首を掻けて、二人の方へ顔を向ける。

「君今日は日曜だから宜敷寐て居給へ。」

「畜生那樣意地悪を爲んでも可いちやないか」

「何も意地悪ぢやない、君が寝て居たいと云ふから、寝て居給へと云つたのさ」

「もう起る、起るから聞かせ給へ、君が見たと云ふのは、全く那の隣の女だね」土井は更に須田の方を向く。

「勿論、早く起きて裏口へ行つて見給へ、今一寸買物に出たらしいから直ぐ戻るだらう。」

「然うか、ぢや一ツ行つて見やう」

土井は威勢よく跳ね起きて、手早く疊んだ蒲團を押し入へ投込んで、楊枝を啣へながら梯下段を下りる。

「は、あ女と云ふと全然氣狂だ」

「彌張病氣だね」二人は見送つて些と笑つたが、須田は火鉢の傍へ来て、

「一体那の女は何だらう？」

「さ、無論素人ぢやない……。」

話してゐる處へ、慌だしく戻つて來た土井は、未だ衝楊枝の儘である。

「何だい？」

「何うしたんだ？」

「何だ處の騒ぎぢやアない！今下で例のを見たんだがね、意外も意外、君、實

に意外だよ。」

土井は目を睨つて、二人の顔をキョロ／＼見ながら、

「僕はあの女を知つてる、須田君は知るまいが、茅野は一緒に行ったから知つてるだらう、ほら、あの錦輝館の琵琶會へ行つた、あの時青柳秀香と云ふ女が出たらう、那れだ、那れに遠い無い。」

「何？あの秀香女史！ふむ然うか？些少も知らなかつた、あの女なら無類飛切だ、然し何うして隣の二階なんぞに燻つて居るのだらう。」

茅野は一寸小首を傾ける。

「土井は須田を顧みて、君隣は琴の師匠だつたね」

「馬鹿なことを言ふな、毎日ペン／＼いふぢやないか」

「まあ何でも可いが、其教へる奴は男か女かね？」齒を磨く手を休めて、氣に懸るらしく二人を見る。

「は、何も然う心配するには當らんよ、君には君の領分があるぢやアない

か、ちやんと女學生と云ふ領分が、何も勢力範圍の外迄手を出して、左や右く言ふには當らんさ。」

茅野が冷笑すやうに言ふと、土井は眞面目で、

「當つても當らんでも構はん、僕はこれとは思へば何處へでも手を出すよ。」厭な千手觀音だ。」

「三面六匹の働を爲なければ當時はなか／＼生活出來ん。外に君の勢力範圍を犯す譯でも」

「何と言つても僕の勢力範圍だよ。ばら掻きや藝人はお得意なもの」

「は、あ、彈ちかれるのがお得意だらう」

「馬鹿を言へ、侮辱するにも程がある。」

「那箇が侮辱してるんだ。」

二人は夢中になつて諍つた。

「おい、止し給へ、今茲で那樣ことを言合つた處で爲方が無い、それより冷え

ない内に早く飯でも遣らうぢやないか」須田は迷惑さう。

「然うだ。」と茅野。

「何だ、下らない。」土井は又楊枝を使いながら、今度はのそりと梯子段を下りて行く。

當番の須田が戸棚の傍で膳立に取懸ると、茅野は真新しい箆で角な座敷を可なり圓く掃除する。

豆腐屋の鈴が戶外に鳴った。

(三)

朝飯が済むと、三人は火鉢を圍んで、ほかりくと卷簾を喫かしながら、又しても女の噂を遣り出した。

「喃、土井、此間聴きに行つた錦輝館の琵琶の名手が、我々の隣家に居ると思ふと、何だか其處に意味があるね」

俯向いて熱心に新聞を讀んでる土井の顔を茅野が覗き込む。

「全くだ。」土井は新聞を捨て、

「恁うして朝晩其秀香女史の美しい顔が見られるなんざ、全く此處へ引越したお陰だと思ふと、永久に此二階が離れたくないね」

「實際だ、既に恁うなつた以上、假令階下から退去を命せられても、容易に立退かれんね」茅野が合槌を打つ。

須田は二人を見遣りながら、

「君等の身勝手にも呆れる、何處を押しせば那樣、音が出るのだらう。能く考て見給へ、始め僕が此二階に爲やうと言出したら、君達は何と言つたい、よもや忘れは爲なからう……」

「そりやア言つた、都合が悪いから悪いって言つたのさ、何も不思議はない」土井は故とらしく、落付いて答へる。

「不思議はない！ふゝん可く言つたね、これが不思議でなけりやア抑も何を不



思議と云ふのだらう」

須田は嘲けるやうな調子である。

「そりや那の時は那の時さ、今とは事情が違ふからね」茅野が口を出す。

「事情が何う違ふ。」

「違ふとも！引越の時には通學を初として渾ての買物に至るまで、實際都合の悪いことだらけだったもの、それが他に適當の所が無いので、仕方なしに此家と定めたのだらう。」

「で今度永久に居やうと云ふ譯は？」

「聞くまでもないだらう、隣りに秀香女史が居ると分つたからさ。些ツとやそツとの不便が有るからつて、現在隣に那磨美人が居るのを知りながら見すく餘所へ引越せるものかい。なあ茅野、君も然うだらう。須田君若し不服なら、今此處で分離しても可い、僕等は飽くまでも此二階に立籠る。」

「然うだとも、併し如何な須田君も豈か那樣野暮漢ではあるまい、他人心有り

吾之を付り度る、歸する所は矢張我々と五十歩百歩さ、なあ須田。」

「僕も敢て反對とは言はないさ。」須田が妙な笑方をする。

「は、あ一本參つたね」と、茅野も笑ふ。  
旋て言を次く。

「那樣事は何うでも可いとして、那々した美人を壁一重向ふに置きながら、只聲を聞いたたり、後姿を眺めたりした丈では甚だ物足らん、勘くとも三人の顔に關るだらうぢやないか。更に一步を進めて、那の秀香女史に接近する工夫を廻らさうぢやないか。何うだい君等の考は……。」

「未だ考は無いが提案は賛成する。」

「僕も大賛成。」と須田。

「所で其方法だが……何か君等に名案は無いか。」

茅野は二人の顔を見較べて言ふ。  
「方法も何も要らんだらう、夜でも外出した時に跡を跟けて、途中で談判をす

る迄さ。」

事も無けに言ふ土井の顔を茅野は呆れたやうに見る。

「おい君、冗談言つちやア困るせ、向ふは我々よりすつと年上だらう、お刺に  
藝人と云ふ肩書付きぢやないか、那樣女學生を瞞すやうな甘い手に乗るものか  
一体君はそれだから困る、先刻も言つた通り君は何うしても、女學生の範圍を  
脱することは出来ないと見えるね、序でだから斷言つて置くが、その女學生も  
「山だし」と云ふ冠詞附さ。」

「人身攻撃は慎しむ給へ。假令ば僕が何うあらうと那樣ことは今關係が無いち  
やア無いか。僕は只僕の一家言としての方案を吐露した迄だ。愚圖々々言ふな  
ら最初から聞かなかつちやア宜いのだ。」

「然う爭論ばかり惹起しては、議事の進行を妨げるよ。」  
須田は二人の間に立つて存りに鎮撫して居たが、何か急に思出したらしく胸を打  
つ。

「うむ、有る、宜いことがある、大々的名案がある！」

「何だ？」

「甚麼名案だ？」

茅野と土井は兩方から詰寄つて、同じやうに須田の顔を凝視する。

須田は得意の笑を顔に浮せて、

「名案と云つて外でもないが、今度ほら例の郷友會があるだらう、一ツ幹事に  
談判して、餘興の中へ筑前琵琶を入れることにして貰ふのだ、然うして愈々可  
いと決つた處で、それを頼みに、三人して隣へ押掛けると云ふ寸法さ。何うだ  
い、名案だらうか……。」

「成程、そりや名案だ然し巧く出来るだらうか。」

茅野は賛成しながらも危ぶむ様子。

「大丈夫？何日も充らない餘興はかしなんだから、偶には目先きの變つたもの  
を遣らなくては面白く無いからね。それに悠々云ふ女が演るんだと云へば

幹事だつて二ツ返事さ。」

「巧く承知すれば可いが……」茅野は未だ不安らしく考へる。

「承知するとも！其點は僕引請ける……」が、然し隣の方は何うだらう、秀香女史が出ることを承諾すれば宜いけれど……」

「そりや構はん。」須田は土井の言葉を遮つて、「先方は兎に角藝人だらうぢやないか、琵琶で飯を喰つてる以上、何で来ないと云ふものか、縦じ事情があつて断わられたにした處で構はんよ。」

「何故？」

「何故つて？考へて見給へ、我々は何も郷友會の餘興に琵琶を遣ふことを周旋するのが本來の目的では無いだらう。只秀香女史に會つて、悪意を結ぶことが出来りやアそれで目的を達するのだ、で、萬一断わられたにした處で、其目的は遂げられる。」

「可笑、分つた。」茅野は土井を顧みて、

「ねえ君、須田の意見通り可決確定と爲やう。」

「可からう。」土井も笑ひながら賛同した。

「では第一着として幹事の方面から運動を開始するかね。」

茅野は二人に意見を免める。

「善は急げだ、早速これから出掛けやう。」土井の發聲につれて、

「宜からう。」

「可からう。」と、三人は外出の用意に取掛つた。

(三)

芝愛岩下の大通りの可なり、廣い路次を入つて突當ると、正面に二階建の建物がある。門札には「野本たけ軒燈は唯野本」と記してある。此家は陸軍士官の未亡人が近頃始めた素人下宿で、ザラな下宿人は居ない代り人数は至つて尠ない。會社員が二人、官吏が一人、毎朝新聞の文藝記者とか名乗る男が一人、それに

主婦と少嬢とを合せて一家六人の小人數である。

丁度午砲が鳴つて間も無いこと、表の格子戸を開けて歸て来たのは、文藝記者の浦波彦吉で、紺の背廣に茶の外套、鼠色の中折帽子を戴つて居る。年齢は二十六七、眼鏡を懸けて、口髭を生して、少しは見榮ある風采、彼は今し方或る文藝の大家を訪問して来たので、其記事を書くべく新聞社へ行く前、晝飯と他の用事を兼ねて、一寸歸宅した。

「誰方？」と、元氣の宜い主婦の聲が奥に聞えて、應て入口の障子が開くと、突如と十二三の少嬢が首を出す。

「お歸んなさい」入口の疊に膝を突いた。

浦波は、無言の儘二階へ上らうとして、段階子に片足懸けながら、

「梅チャン、誰も來なかつたかい？」

「え、誰方も………」と、言つて小嬢は一寸考へたが、「あ、然うく、貴君の部屋に先きから待つてる方があつてよ。」

「持つて？ 誰だらう？ 別嬢かね。」

「あら嫌な、男の方ですわ。何日も被入しやる方よ。」

「吉野か。」

「然うく、吉野さんて方。」

吉野次郎、浦波が無二の親友で、今大學の法科に學籍を置いて居る。

「待つてるんだね」と浦波は小嬢に繰返し問ふた。

「え。」

「然うか、ちや後からお茶を頼むよ、序でに菓子もね。」

浦波は足音荒く二階へ駆上る。

階子段を上つて右に廊下を突き當ると、直ぐ南に向いた六疊の坐敷、それが部屋である。

紺緋の綿入に小倉の袴、學生風をした吉野は、肘懸窓の處に据ゑた机に凭り懸つて、一心に西洋雑誌の挿繪を見て居たが、くるり向き直り、

「何處へ行つたのだ、随分待つた。」

「然うか、そりや氣の毒だつたね、一寸半込から麻布の方へ廻つたものだから……。」

浦波は帽子と外套を隅の方に押しやつて、火鉢の前に胡坐を組む。

「何うだい、面白いことがあるかい？」

坐るのを待ちかねて吉野は訊く。

「面白いこと？」 浦波は眼を瞪つて彼が得意とする微笑を浮かべながら、

「あるとも！大にあるよ！」

「例に依つて例の如しぢやないか？ 不相變のお惚けは恐入るせ。」

「士三日見ざればさ、今日君と會ふのは何日目だと思ふ？」

「然うだな、この前會つたのは上曜の晩だつたねえ。」

「だから最う一週間以上に……ぢやア無いか？」

「然う。」

「三日見ざればと云ふのが本文なのに、一週間は無いのだから……以て察すべしさ。」

「何か有つたのなら早く聞かして呉れ給へ、何も然う勿體付けるにや當らん。」 吉野の嘲笑ふのを尻眼に懸けて、

「いや何も勿體振るのぢや無い！ 只君が例の……なんて餘りお安く見るからそれで、僕大に慎重の態度を執つて見た迄だ。」

「何だ充らん。」 吉野は一寸横を向いたが、「勿體振らずに早々と話し給へ。」

「實はね、今日も其處へ廻つたので大に手間取つた様な譯さ。」

「其處とは？」

「秘密？」

「は、あ又拵へたね、相手は何だい。」

「勿論別嬪さ！ 素的なものだ！」

「別嬪は可いが、一體何者だ、女學生か。」

「まあ少し御披露しやう、船長の令嬢、中流以上の家庭に育た立派なものさ。」  
「ほう、それは偉い！ 實際出来たのか！」

吉野は我知らず乗り出した。

「否、實は着手したばかりさ。然う容易く出来るものか。先づ旅順の攻圍軍同様、十分計畫を立て、徐ろに政落すんだね。」

「何んた、まだ出来たのぢやないのか！」

「然り、而して前途多望也。」

「一體那樣令嬢と何うして知合ひになつたのだい？」

「それか、それは職掌柄で、手のものさ。少し惜いけれど種を明かさうか、實は君には未だ言はなかつたが、此度僕等の仲間が主唱者で大規模の文藝會が出来上るだ、僕が其委員の一人だが、意外ぢやないか、その令嬢が賛助員で非常に奔走して居て呉れるのだ。で打合せや何かで始めて顔を知り合つたのさ、處が君話して見ると駭くぢやないか、それが非常の芝居通でね、文藝の事も無論

明るい。有繋の僕も少しばかりたぢやないだよ。」

「芝居通を以て誇る君が辟易するやうちやア餘程だと見えるね。」

「鋒芒當るべからずさ。」

「ちや所詮君の手に負へる代物ぢやないせ。」

「所が大に代物であるのだ。何故つて、會ふ度び、僕に話しに来て呉れ、つて然う言ふのだ、だから假令僕のことを左や右思はないまでも、勘くとも僕に敬服して居るのは事實さ。」可いかい、妙齡今や十八九ともあらう令嬢が、何で我々を無意味に招くもんか、其間機微の消息は局外者の與り知る所にあらずだよ。」

「何だか分るもんぢやない、まあ可いから失じらぬやうに遣り給へ。」

「併し君の今話した其令嬢ね、で、名は何と云ふの？」

「秘密！」浦波は濟込んで居る。

「先之船長の娘だと云つたね。然うすると何うやら僕にも心當りがありさうだ。」

「心當り？」浦波は目を圓くしなから急込み調子で、「心當りつて何だ？親戚か？知己か？えッ君のその心當りの女と云ふのは何だい、何者だい。」

「は、あ憐うなると君でも聞きたいだらう……。」「僕も秘密だ！」

「那樣ことを言ふものさや無い、ちや僕も話すから君も話し給へ。」

「君から先きへ言ひ給へ。」

「まア君から……。」

「狡い奴だな。」吉野は笑ひながら、「それぢや僕から言はう、僕の知つてるのは名川絹子。」

「名川絹子？」浦波は繰返して、驚きの眼を見張る。

「然うだ、それだ、名川絹子嬢だ。」

「だらう」と吉野は得意の鼻を蠢めかす。

「では君も知つてるのだね。」

「知つてるとも……しかも同縣人で二三面會つたこともある！」

「會つたこともある？」二の句も續かない程呆れたので。

「お待遠うさま。」

此時小婢が静かに障子を開けて、茶道具と皿へ盛つた餅菓子を持つて來た。

二人は互に顔を見合したまゝ無言である。

「此處へ置きますよ。」

「おい、序にこれを。」

火鉢に懸つて居た薬罐を取つて、今部屋を出やうとする小婢を浦波が呼び留める。吉野は最う菓子皿の餛餅を摘んで甘さうに頬張つて居た。

(四)

小婢は薬罐を提げて、部屋を出ると、バタリ／＼と上草履を引摺りながら行く。二人は稍暫く無言で居た。

窓の障子には今正午の日影が一杯に射して、枯柳の枝が少しばかり映つて居る、其墨繪で描いたやうな枝の間を縫つて、時々小鳥が影繪のやうに飛ぶ。まだ冬だけれど何だか暢びりした春のやうな心持だ。

「暖つたかくつて宜い氣持だね。」吸みさしの茶碗を吉野は下に置くと、光線の能く通つた明るい室の隈々を見廻しながら、「君の部屋に較べると僕の下宿は全で北國の洞穴だね。は、あ絹子嬢に好かれる人は部屋まで違つたものだ。」

「おい君、愚弄しちや可かんよ。」と苦笑する。

「今の話したと、君は絹子嬢の事を能く知つて居るだらうが………、浦波は心配さうに又聞く。」

「そりや知つてるとも！而も僕の知つて居る處に依ると、君の空想は實現しないぞ！否、そればかりぢやない、君の所謂機微に消息も甚だ當にならんね。は、あ併しこりやア僕の局外觀だから、實際は何うか知らんけれど………」

浦波の調子は前とは全く變つた。

「實際も何も無いが、君の其到底見込が無いと云ふのは、そりや何ういふ點からだね。聞かして呉れ給へ。」

「は、あ僕の一言能く君の肺腑を刺つたかと思へば實に痛快だね。」

「おい、吉野、冗談ぢやないよ謂は、僕の生死浮沈に關する問題だ。君のやうに然う茶化しちやア困る。」

「何も茶化しは爲ん。唯君が餘り勿體振るから、一ツ側面攻撃と出かけて見た迄さ。あの女には兎に角交際社會の流行兒で而も絶世の美人、加ふるに未婚の處女だらう、嫁に貰ひ手、聲に來手それは降るやうだと言ふ迄もないだらう、高が新聞記者に過ぎない君が、いくら地團踏んだつて到底追ツつく事ぢやアない、止せ、止せ、今の内に思ひ切る方が餘ッ程惻口だ。」

「然う情ないことを言つて呉れるなよ。そりや地位は無論異つて居やうさ、併し僕だつて男だ、一旦憊うと思つた以上、只地位が違つて居る位で、指を喰へ



て引込むことは出来ぬ、鈍くまでも先の心を動かして……………」

熱心の情を目に燃やしながら吉野を睨める。

「到底駄目だね」と相手は空嘯いた。

「駄目だ！」

「あゝ駄目だ！あの女には最う定まつた所夫があるのだもの。」

浦波の驚きは隠さうとしても面に出る。

「いや、所夫と云つては語弊があるな、公然約束したと云ふ男があるのさ。」

「……………」

驚いた人は只目を瞞るのみだ。

少嬢が丁度薬罐を持つて来る。

「おい、此處へ呉れ。」

吉野が婢の手から引手繰る やうに薬罐を取ると、波々と急須へ差した。そして茶碗へ注いでグイ〜と幾回も喫み干す。於て菓子皿の底に残つて居る最

後の一ツを取らうとして出した手で、何を思出したのか膝を打つた。

「呸、僕全然忘れて居た、これから一寸教授の處へ廻つて、少し頼まなきアならんことがあるから、これで失敬しやう。」

「まア可いちやないか、未だ聞きたいことが大いにあるし……………」

「いや、全く急ぐんだ。又来る。」と、傍にある角帽を取る。

「君も今年は出るんたつたね。」その角帽を見て浦波は思出したやうに言ふ。

「併し落第するかも知れん。」

「巧く遣り給へ、兎に角終ひだから。」

「何有に及第だけ爲りや可いのさ、席順なんぞ何うでも介はないよ、證書を貰へば後は此方の物さ。法律學者になるのぢやアなし、何うせ世間へ飛出して、

明盲を相手に法律を振廻すんだもの。學問なんて何になるものか、卒業してか

ら先きのことは只自分の腕と腹さ、何の學校の書物を読む位に大事な頭腦を痛

めるなんて、那樣馬鹿々々しいことが出来るものか。」

て引込むことは出来ぬ、飽くまでも先の心を動かして……………」

熱心の情を目に燃やしながら吉野を睨める。

「到底駄目だね」と相手は空嘯いた。

「駄目だ！」

「あゝ駄目だ！あの女には最う定まつた所夫があるのだもの。」

浦波の驚きは隠さうとしても面に出る。

「いや、所夫と云つては語弊があるな、公然約束したと云ふ男があるのさ。」

「……………」

驚いた人は只目を睨るのみだ。

少婢が丁度薬罐を持って来る。

「おい、此處へ呉れ。」

吉野が婢の手から引手繰るやうに薬罐を取ると、波々と急須へ差した。そして茶碗へ注いでグイ〜と幾回も喫み干す。於て菓子皿の底に残つて居る最

後の一ツを取らうとして出した手で、何を思出したのか膝を打つた。

「汗、僕全然忘れて居た、これから一寸教授の處へ廻つて、少し頼まなきアならんことがあるから、これで失敬しやう。」

「まア可いちやないか、未だ聞きたいことが大いにあるし……………」

「いや、全く急ぐんだ。又来る。」と、傍にある角帽を取る。

「君も今年は出るんたつたね。」その角帽を見て浦波は思出したやうに言ふ。

「併し落第するかも知れん。」

「巧く遣り給へ、兎に角終ひだから。」

「何有に及第だけ爲りや可いのさ、席順なんぞ何うでも介はないよ、證書を貰へば後は此方の物さ。法律學者になるのちやアなし、何うせ世間へ飛出して、明盲を相手に法律を振廻すんだもの。學問なんて何になるものか、卒業してから先きのことは只自分の腕と腹さ、何の學校の書物を讀む位に大事な頭腦を痛めるなんて、那樣馬鹿々々しいことが出来るものか。」

言ひ捨てに吉野は立ち上る。

「まあ可いぢやないか。」

「いや、歸る。」袴の皺になつた所を撫でながら帽を冠る。

「ぢや又来給へ。」

二人は階子を下りて上り口で別れた。

浦波は直ぐ二階へ駆け戻つた。そして落膽したやうに机に靠れた、兩の腕に頭を抱へて種々の空想に耽つた。

吉野は絹子を知つて居ると言ひ、全縣人だと言ひ、約束した男があると言つた。それは或は事實かも知れぬ。併し何うして然う委はしく知つて居るのだらう、只同縣人としての關係上、其姓名と平素の行動とを知つて居るのか知ら。それとも絹子と親しく交際して居るのか知ら。若しも後者なら、那の男の性質として、今日迄自分に隠して置くやうなことはない、して見ると只除所ながら聞知つて居ると云ふに過ぎないな。併し吉野は此道にかけては中々油断のならぬ男

だから、或は絹子に對して大に計畫して居るのかも知れぬ。先刻のやうなことを云ふのも、自分に断念させやうとする策略かも知れぬ。油断すべからず、決して油断すべからずだ。若し吉野も野心勃勃ならば、我輩は競争して勝つて見せる。だが他の男と結婚の約束をしたと云ふのが事實だと、一體如何に爲たら可いのだらう？……………

浦波は這麼事を思ひながら顔を上げると、机の上に吉野が徒然に堪へかねて、開るげて置いた外國の演藝雜誌がある。丁度その開かれた頁には彩色した美しい女優の姿が挿繪になつて居る、浦波は何氣なくそれを眺めて居た目付は穏かだが、その心の底には荒波の如く様々の空想が動いて居る。

(五)

浦波は不圖したことから、知己になつた絹子の美くしい姿に、一方ならず心の動搖を來した。二度三度と會見が重なるに連れて、それが愈々劇しくなつた。

固よりまだ戀といふ迄に進んでは居らぬが、絹子に會ひ、絹子と語るのが、何より樂しみて、何を考へるにも、それを中心に爲るやうになつて居た。然るにその絹子が、既に定まつた所夫ある身と聞いた時は、行成魂を抜かれたやうにボンヤリした。

三十

吉野は平素虚談妄説、人を翻弄するのを以て得意とする男、その話を全然信する事は出来ないが、又否定することも出来ぬ此上は手の盡くし得らるゝ限り自分で取調ぶるの必要がある、………怎う思つて、浦波はそれとなく絹子の身の上を索り始めた。

幾日かを其調査に費した結果に依ると、絹子の父は名和正之と云つて、郵船會社の所有船富士丸の船長、居住は浦波？自身が二三回訪問して知つてゐる如く麻布富士見町の高臺で、敷奇を凝らした和洋折衷の二階建、廣濶とした邸内には金に飽かして集めた奇木珍草庭を埋め、見るから其有福さが堆量される。絹子は其名和の總領娘である。

娘の身を飾りたいのは親の情である。而かもそれが總領娘で、美しい絹子である。兩親は彼を掌中の珠玉として愛で慈しみ、學問手藝それ等は言はずもの事、衣装から髪飾り履物の末に至る迄で、毎も流行の先驅を爲せて居た。天然の麗質は愈よ美しく、益す輝くばかりである。小學を卒へて女學校に通ふ頃には、絹子が美容麗姿は知る限りの人の間に稱揚されて居た。女學校を出る時分は益す其評判が宜しくなつて、女學雜誌の口繪に載せられた事などは幾度か知れぬ。芳紀今年二十、花は今眞盛である。

父なる人が不斷手廣く交際した處から、名和家には種々雑多の人物が出入した。職掌柄で船員の往來は固より多かつた。で、老人連は別として、若い連中は孰れも美しく絹子に眼を付けた。そして何うかして絹子に近付かうと心に騒いで居た、無様にも袖を引くやうな男も中にはあつた、併し絹子は決して夫等のことに頓着なく、附合ふべき者には心を開いて附合ひ、避くべき者は無論避けた、男子の追隨を許さぬと共に、自分も亦情を動かすやうなことは無

かつた。と云つて絹子は決して冷情なのではない、文藝の趣味も持つて居る、劇の趣味も持つて居る、其學校時代には、活人畫が流行して、絹子も其渦中の一人となり、無鐵砲な新聞雑誌の煽動に乗つて、夢のやうな俳優志願の心を起し、父親から叱られた事もあつた。併し美くしい女の常として、絹子は餘り男のことを彼是思はなかつたので、随分男の交際もあるけれど、今日迄忌はしい噂は、まだ一度も立つたことが無い。

絹子が所天を持つことは、吉野の云ふ如く事實である。何様、美くしい絹子のことであるから、嫁に欲しい、婿に成りたいと、手を代へ品を換へて、其希望者は降るやうにあつた。其多數の希望者を押退けて、美事月桂冠を得たのは、高村辰夫と云ふ海軍省出仕の造船中技士で、其媒介者は父正之の親友水田海軍大佐であると云ふことが分つた。

高村に就いては、其職務の關係から推して、無論工科大学の出身と云ふことは知つた。併し浦波はそれ以上、高村のことは聞かなかつた。

浦波が探り得た事實は以上の如くである、彼が心の奥に描いて居た空想は吉野が云つた如く、到底絶望の外は無い。併し浦波の思ひはまだそれに失望する迄に暮つては居ない。絹子に對する關係とても、只友達と云ふ迄のことであるから、縦し所天があらうと、何があらうと一向介はぬ。處女であれば何となく嬉しいけれど、人の妻でも差支ない、只共に文藝の趣味を談じ、演劇の興を話せば足るのである。今迄それはあつたが、將來絹子は高村の妻となつても、猶自分と同じ交誼を盡して呉れるだらうか、多くの女は一旦所天を持つと、皆悉やく家庭の内に燃つて、趣味も、希望も、理想も、凡て其所天の爲めに犠牲として了ふのが常である。絹子は眞逆に那樣女ではあるまい？、今彼は多くの人がから賞賛を受けて居る、敬慕を受けて居る、所天たるべき其一人に愛されずとも、愛するものは幾でもあるのだ、女に有がちな虚榮心から考へても、其深い一人よりは、淺くとも却つて多數の人を喜ぶ情があるかも知れぬ、左に右絹子は家庭に燃つて了ふやうな女ではない。高村との婚儀に就いては、絹子とて

も無論喜んで居るだらうが、自身の心まで——抄くとも自から美しくしいと思ふ心、それ迄は決して捨てられるものではない。浦波が此處迄考へる間には尠なからぬ煩悶もした、懊惱もしたのである。

(六)

麻布區一半の繁昌を此處に集めて、十番と云へば此界限に誰知らぬものも無い道幅は狭いながらも立並ぶ兩側の露店は、無数の燈火に景氣を見せて、此處ばかりは暗夜を知らぬ街の賑ひ、素見半分の散歩に、道行く人の肩摩殺撃、年の暮のやうでもある。今日は月の十四日、朝から濕昏れて、正午過ぎには風さへ加はり、夜に入つては寒でも来さうな空合になつた、商店は宵の口から店を閉め、夜商人は張店も出来ないで、まだ八時前であるが、見渡したところ、横町の角におでん屋の行燈が只一つ見えるばかり。小暗い巷は全然火の消えた如く、有繫の麻布十番

も今宵の寂しさは昔に返つて、話に聞いた狐や狸が出さうである。此寂しい町の、と有る横すから現はれた男女の二人連がある。

鳥打帽子を目深に被つて、二重廻を羽折つた若い男が先に、女は其後から靜に跟いて行く。吾妻コートに頭巾といふ扮装で、夜目には何者とも分らぬが、これは例の琵琶の名手青柳秀香女史である。

「お、寒い」と、女は身を慄はして、男の傍へ頓と寄添ひ、

「高村さん、這麼お寒いにお出を願つて何うも濟みませんのねえ」

「何有那樣ことは些ツとも介はんが……今日那の家で貴女に逢ふとは、實に意外で、貴女は矢張り神戸に居るとばかり僕は思つて居たのに、圖からず會つたので、僕は全く驚いた、それも神戸に居た時分のやうに、三絃でも持つて出て来たのなら未だしも、これから餘興として筑前琵琶が始まるからと云ふ前觸れだらう、僕は何んの氣なしに見ると、それが貴女だから、僕はもう胸がツク／＼して何を貴女が謳はれたのかは、／＼些ツとも耳へは入らなかつた。」

男も寒さうに外套の襟を掻合せながら秀香を顧みる。

三十六

「私だッてまあ甚麼に駭きましたらう。」

「併し何時、何うして東京へ出て来たのです。實は其場で直ぐにも聞きたかつたが、場所が場所だから一旦下宿へ戻つて、早速今夜お訪ねしたやうな譯で。」

「お寒い處を本當に濟みませんでしたのね、那樣に御親切にして下さるんですもの、妾もう……」

「秀香は何を考へたか、後を云ひしふる。」

「は、妾が何うしたッて？、うむ分つた、僕の惚さ加減に呆れたのでせう。」

「まア那麼ことを……何うせ妾は那樣女ですからね。」

「那樣女で無けりやア何だ？」

「何でも可う御座います。」

女の聲が高かつたので、通りすがりの職人らしい男が回顧いて二人を見る。

「まア静かにしてくれ、這麼處で騒がれちやア人聞きが悪い。」

「何うせ御迷惑で御座いませう。」

「然う云つて呉れるな、折角久振で逢つたのちやア無いか、兎も角何處かで悠り話すとしやう……」

「が、都合は宜いのかい？」

「おほ……、那樣にお氣を廻さなくつても宜う御座いますよ。」

「でも、家の方の都合は？、少刻位遅くなつても宜い？」

高村は飽迄も眞面目である。

「え、宜う御座いますとも！」

女は動ともすれば後れ勝ちになるのを追付きながら、袖と袖との觸合ふばかり高村と並んで、

「けれど貴君は？……」と、訊く。

「僕？」

高村は女の方を見返つた、が、他の事を考へて居たらしく、それには答へず、

「東京へ来たのは何時？」

「妾ですか」と、秀香は稍々狼狽へた調子で、

「去年の十月の……」

……確か二十

三十七

四五日頃でした。」

「十月！ちや僕が神戸を立つと間も無かつたのだね、何う云ふ譯で然う急に藝妓を止めて琵琶法師なんか早變りをしてしまつたのか、餘り變り方が急劇ぢやア無いか。」

「急劇ツて程のこともないでせう、妾だつて段々年は取りますし、それに、兄が那の通りの怠惰ですからね、幾ら働いたつて充りませんから、恰ど身體も自由になる時だつたので、つい他人に勤められて琵琶の仲間へ入つたのは、貴君が神戸をお立ちになつた翌月でしたわ。恁うして商賣替へをして見ますと、何だか勝手が違ひましてね、寂しいやら、面白くないやら、急に東京が戀しくなつて、到頭見切つて出て來ました、何うせもう持崩した身體ですから、一生恁うして送らうと覺悟を決めたのです、人間と云ふものは考へると本當に充りませんのね。」

「那樣ことも無からう、又良い芽の萌く時も來るさ。」

「それはね、貴君なんかは段々御出世なさるばかりでせうか、女は逆も駄目ですわ妾もう諦めて居りますわ。」

「何も然う無理に諦めるにも及ばんぢやないか、貴女なんか何日玉の輿が迎へに來るかも知れん。ひよつとしたら良う迎ひに來て居るのでせう。」

「あら宜う御座いますわ、妾那樣方があれば、何も恁うして苦勞なんぞ致しませんわ。」

其儘口を噤んで、何か荐りに考へながら歩いて居たが、應て顔を上げて、

「ねえ高村さん、妾恁うして居ると、何だか掛川に居た幼さい時分のことを思出してなりませんわ。人の身の上つて随分變るものですわね。」

「那の時分のことを思ふと全で夢さ、第一貴女は恁麼立派な女になつてしまし……………」

「まあ随分ですのねえ、何ば妾がお婆さんになつたからつて餘りですわ」  
態とらしく怒つて、ツンとして歩く。



「は、何も那様に怒らんでも宜いさ、お互に掛川以來のお馴染ちやア無いか  
それに今夜は……。」と、云ひかけて舍す。  
「お合乗如何です。」出し抜けに車夫が叫んだ。  
二人は今恰ど一の橋へ差懸つた處である。

(七)

二三日前から催して居た雪空は、今朝急に吹き返した東風の温暖に、雲は一た  
まりもなく雨に解けて、正午少し前からシト／＼と降出し、日暮頃には大分通  
路も泥濘んで、不断は乗客の昇降で混雑を極める青山一丁目の電車停留場も、  
役所歸り學校歸りの一群を運び去つて後は、有繫に乗客の昇降も稀となつて、  
雨の中を廣尾線に待合はして居るのは制服を着けた海軍將校の二人連。其年長  
者は水田海軍大佐、青年は高村造船中技士、二人は今海軍省の歸りである。  
軍服の氣安さは外套に全身を纏つたまゝ、降頻る雨を物ともせず、乗車待つ間

を何やら存りと談笑に耽つて居たが、尙待遠しくなつたと見えて、大佐が、  
「何うしたらう、馬鹿に遅いちやア無いか、又停電か、弱るのう、平素は兎も  
角道慶雨降りに、何時迄も濡佛は恐れ入るなあ。」

「全くです、随分、電車は時間を無駄にさせますよ、これが文明の寄與した最  
善最良の交通機關かと思ふと、實に情なくなりませぬ。」高村は合機を打つた。  
「全くだ、そりや江之島や小田原の電鐵に比較すりや上等だが、一國の首都た  
る東京で道那不便都合があつては困まるの。」

「否、江之島や小田原は論外です、ありやア比較すべき限りぢや無いです、  
現代ではまだ電車を軍隊の輸送機關に使用しませんか、若し將來之を利用する  
やうな場合があるとして、道慶ことでは所詮駄目ですね。若しこれから五十年  
六十年後、最度便利な交通機關が發明された時分、明治四十年代には日比谷か  
ら廣尾迄行くのに、一時間も一時間半もかゝつたと話したら、誰しも本當に思  
はんでせう、然う思ふと、恚うして濡佛になつて居る姿を寫真にでも撮つて置

きたいですね。」

「俺はそれよりもまだまだ是非撮つて置き度いものがあるんだが……。」

憊う云ひかけて、水田大佐は意味あり氣に高村の顔を覗き込んだ。

「何です、甚麽ことですか。」と高村は凝と大佐の方を噴めて、其顔色を窺ふ。

「は、は、は、」大佐は笑ひ出した。「何も然う真面目にならんでも宜いがの、私は何も角も能く知つとるぞ……。」

「知つてるとは、何ういふ事なので。」

「何有何でも無いことだがな。私は只君の艶福な光景を寫眞を撮つて、それを

絹子さんに捧げたいと思とるのだが……。」

大佐の至つて不真面目などは反對に、高村は甚だ真面目になる。

「何です、其艶福と云ふのは？」

他くまでも腑に落ちぬらしく云ふ。

「は、あまだ悟入出来んかの、君も餘程鈍根だの、こりや何うしても三十棒を

加へんけりや駄目か。」

「僕には全く分らんです。」

憊う言ひながら、彼は内心困惑して居るので。

「では、其寫眞の背景だけでも説明しやうの、まづ時候は一月中旬——此四五

日前のことだ、處は麻布十番の宵闇を縫つてとか何とか言ふのだらう……。」

高村は平氣を製つたけれど、其顔色は見る／＼變る。

「二人連立つた様子はなか／＼可かつた。」

「ぢや貴方は御覽でしたか。」と思切つて言ひ放つ。

「軍機の秘密が暴れた譯か、はつ／＼はつ。」

大佐の明け放しの聲が雨聲を破つて四隣に響く、丁度其時電車が來たので二人

は乗つた。

二三の乗客は、皆悉く此處で降りて、廣い車内は只二人限である。

「高村君、彼女は一體何物かな。」

電車が動き出すと大佐は聞出した。

「那れですか。」高村は困つたらしかつたが、「那れは筑前琵琶をやる青柳秀香と云ふものです。」

「然うだらう、何うも唯物では無いと思つた。無論お馴染なんだらうの。」

「何うして！馴染どころの騒ぎぢやありません、東京では那の晩たつた一遍顔を合せた限りなんです。」

「昔馴染か。」

「實は小學時代の友達なので。」

「筒井筒振分髪のこと……と云ふ譯かな、は……何方にしてからが安くは無いの、併し絹子さんが聞いたら、それこそ大變だらう。」

「何も不都合な事は無いから構はんですが、充らん問題が起ると甚だ困るんです。……絹子さんの方は兎も角、何うぞ兩親の耳へは入れぬやうに願ひ度いです。」

「大丈夫、私だつて那樣野暮漢ぢや無い、は、あ出るに秀香あり入るに絹子さんありか、高村君、君ア何うしても鮑福家だのう。」

大佐は罪も無く高らかに笑ふ。

電車は今墓地下へ着いた。大佐は何日も此處から下りるのである。

話に熱中してゐた。大佐は、「墓地下々々」と、車掌の呼ぶ聲に駭いて、「や、失敬ッ」とばかり急遽と唐戸をあけて車掌臺に下り立ち、高村と眼を交はして、一寸微笑を浮べたが、軽く舉手の禮をして車を下りた。電車は石でも引いたやうにガタリと動出す。

高村は延上つて雨の流れる車窓から大佐の後姿を見送つて居たが、應てその姿が見えなくなると、落膽したやうに腰を下した。さうして外套の羽翼の下に、双の腕を拱ぬきながら、深き〜默想に耽る。

高村は電車に揺られながら、様々のことを胸に浮べる。秀香を誘ひ出して、芝浦の見晴に飲んだ其夜のことを思ひ出す。よもやと思つて居たが、水田大佐の目に止まつたが、留意なき大佐の事であるから、素より我の不爲めを計らう筈はないと信ずるが、然し油断は出来ぬ。既に大佐の目に留まる位であつて見れば、其以外の知人の眼にも取まらぬとは限らぬ。怪しい關係が二人の間にあるのではないが、最う絹子と云ふ公然約束した女があつて、遅くも三四ヶ月後には結婚するのだ、既に同僚間にも公然の秘密となつて居る。それを此場合に臨んで他に關係した女があると云ふ様な噂が立つて、先方へ聞えるやうなことがあつたら、又甚麼騒ぎが起らぬとも限らぬ、破談になるのを恐れるでは無いが一生を契るべき妻を娶るに、所天たるべき自分の不品行が原因となつて破約されたとあつては、先方に對して耻かしいばかりか、他人に對しても耻辱な譯だ事實怪しい關係でもあるなら爲方がないが、さもなくして兎や恚う言はれるのは實際辛い。實は今夜にも芝浦の例の家で逢はうかと思つて居た。併し今は大に

考へねばならぬ、行かなければそれで宜いやうなもの、通一遍の交際ではなく、二十年以上、小學以來の幼友達では無い乎、何も惚れたはれたといふ譯ではない……。

此處迄考へた時、高村は其郷里の小學時代を回想した、遠州掛川の町、其處に自分の父は醫を業として中流の活計を立てて居る、自分は其一人子である、年寄つた父や母は今も猶郷にあつて壯健に暮らして居る。時折歸省する度毎、別に變りもせぬ其昔の家の前に佇む時、いつでもカバンを提げて學校から戻つて来た時分を思出すのだ。家の直近にあつた學校は、四五年前火災に罹つて、昔の名残は見る由もないが、子供心に大きく美しいと思つた木造二階建の校舍は、今も猶歴々と眼に残つて居る、硝子窓に糊を打つけて先生に叱られたことや、木柵を乗越して小半日の禁足を喰つたことや、何かなしに能く覺えて居る名は忘れたが同級生の誰彼の顔も皆能く覺えて居る。黒板の前に立つて面白い修身講話に満室幾十の生徒の視聽を集めさせた優しい親切な教師の顔も、顯然

と胸に寫る、「高村さん」と讀書の時は何時も第一番に自分を呼んだ、其聲が今も猶耳にある。自分は其當時、何時も級の首席を占めて、品行も善い方であつた。教師は他の同級生を叱る時、何時でも自分のやうにしると云つた、「男生では高村」恣ふ驅はれる自分の嬉しさ、まア甚麼であつたらう、今考へても胸が湧き立つやうな心地がする。

其時分、秀香は本名の青柳秀子と云つて自分と同級の生徒で、自分が男生の標準であつた如く秀子は女生徒の模範であつた、今でこそ男女の教室に嚴然たる區別はあるが、自分の在學時代には、其當時の教育主義の主張であつたか、乃至は教授上の都合であつたか、或時は男女を同じ机に並べて顔を赤らめさせたやうな事もあるで、自分の學校でも席こそ別であつたが、教室は男女一緒であつた、だから同級の男女は、互に相知るの機会が多く、秀子も能く自分を知つて居た、自分も無論秀子を知つて居た、其同じ優等の二字に、二人は妙に牽引けられた。同じ女生徒でも、自分は一番秀子が好きで、何だか譯分らず

同情を寄せて居た、地位の懸隔とか身分の相異とか、那樣複雑な關係は更に考へず、只何氣なく自分に相應しい女だと思つた、顯はにそれとは云はなかつたが、自分は確に秀子を慕ふて居た。併し自分は醫師の息子、秀子は可なり貧しい大工の娘であるから、逆も一緒になれないことを悟つた、否自分がそれを悟る前秀子は既に半途で學校を退つて了まつたのである。今日あつて明日は知らぬ小供心に、何時か秀子の事も忘れて了ひ、東京の學校へ出た時分には、只も未來の空想に驅られて居た。それが自分は海軍の依託學生であつたから、大學卒業後直ぐ造船中技士を拜命して、海軍省へ出仕、間もなく驅逐艦製造工事の監督として神戸の川崎造船所出張を命せられ、滞在約半年ばかり、去年七月工事竣成して歸京した、恰ど其一二ヶ月前、意外にも神戸の某樓で秀子に出會つたのだが、十年振りに見た彼の姿は全然變つて、昔の女生徒の面影は些つとも無かつたのである。

其時彼は三味線を弾き、歌を唄ひ、愛想を賣つて、其日を送る藝妓であつたか

五十一  
ら自分は實に驚いた、今昔の感に堪へなかつた、貧しい大工の娘であつた秀子の運命は、多幸ならぬにもせよ、然りとて餘りな變化！昔は自分と肩を並べた女、或場合には自分の競争者でもあつた、その秀子が藝妓になろうとは………憐れういふ事は小説などには書古してあるが、實際経験して見ると、實に………かれる！自分は胸の奥深く秀香（其時はヒナカ）の名を彫り付けられた。其後自分は今まで、餘り行くのを好まなかつた茶屋小屋の門をさへ潜るやうになつた、度重なるに従つて、昔とは違つた情が出て、將來二人は甚麽ことにならうと、那様事まで考へた、それが突然東京へ歸ることになつて、自分の境遇は一轉した、危くも奈落の底に墜ちやうとして、幾かに踏み耐へられた今や近く妻を迎へて自分の一身を定めやうとする此間際、彼は又しても自分の前に其姿を現はした。而かも自分は現に彼れと再會までも約して居る。思へば不思議な縁である。思ひ去り思ひ來つて、高村は我と我が心が分らなくなつた、利害是非の判断、

それは考へる迄も無いのだが、只その判断を掩はんとする一團の雲、今の高村はそれが拂へぬ。霞町、笄町と數ある停留所を素通りして、電車は急走した、今は施て廣尾である。永い間黙想に耽つて居た高村は、此時弗と外面を眺めたが、雨はもう全然歌んで、遠く目黒の丘のあたり、雲の霽れ間を、落日の影が淡く動いた。

(九)

一月も末近く、蒲田大森などの梅の便りを新聞が書出すと、人もソロ／＼噂を爲出した。不斷は學生連の野球や機械體操の外に是と云ふ見物も無い日比谷公園も、今日日曜の珍らしい好天氣に園内は何日に無い賑はしさであつたが、正午頃から西風が吹出したので、折角の人も見る間に減つて、其處此處の共同椅子には、子守女や、使ひの途中らしい小僧の二三人が見えるばかり、入口の石門に倚か

いつて居る新聞賣の姿さへも見えなくなつた。日脚はもう午後三時を過ぎたらう。

満員の札を下げた青山行の電車が、公園側の停留場に停まると、動搖々々と七八名の乗客が降りた、其中の三人の學生は例の須田、土井、茅野の面々で、今日神田の或席亭に開かれた郷友會の戻りだ、土井の發議で此處に廻つたのである。土井は休日になると、時々一人して日比谷、芝公園などを彷徨いて、若い美しくし女の通るのを見ては、それを娛樂の一つとして居るので、今日も無論それが目的、梅が見頃だからと二人を嗾して、態々此處へ下りた。

「何うだい、今のは……。」と、土井は立止まつて、今走出した電車の方を見返りながら、「何處迄も跟いて行きたかつたね、那麼美人を見付けて置きながら見すく此處に降りるなんざア實に惜しいことだ、君等が居なければ僕は早速追跡する！」

茅野はしげくと見遣つて居たが、

「此處へ降りたのは元來君の發議ぢやないか、それを僕等の所爲でもあるやうに、怪しからん。」

「自己中心主義も事によりけりだ、然う自分勝手ばかりし云つては實際困るよ、共産團を組織してる三人ぢやないか。」

須田も口を入れる。

「然う無氣になつて怒るなよ、僕だつて何も自分勝手を云つのもぢやない、只餘まり美しいと思つたから不知、那云つた迄さ、眞面目に聞かれちや大に困るね。」

「困るなア我々さ、這麼寒いのに吹晒らしの公園なんか歩かせられて……見給へ、梅なんか全咲いてや爲んせ。」

「梅どころか、人ッ子一人だつて見えやアしない。」

茅野か憊う云つた時、恰と向ふから女學生らしい二人の女が連立つて來るのが見えた。

「おい、茅野、君の眼は何處へ附いてるんだい、向ふから来る那れが見えないのか、しかも別嬪の……」

「は、君は女さへ見りやア美人だと思ふんだね、眼を小擦つて能うく見給へねえ君、何處が美人なのだらう。」と、須田を願る。

「僕も美人とは思はんね。」

「君等は同盟して僕を攻めやうと言ふんだね、宜しい、それならそれで、僕にも覺悟がある。」

「覺悟！こりや面白い。」茅野が握拳を固めて土井の傍へ近寄た時、女連との距離が大分近くなつたので、三人は急に足を早めて、疾蹀と歩き始める。

恰と池の縁の中程で女連に出會つた。

「果して！」

擦違ひさま茅野は慙う叫んだが、

土井の顔を見ると行成「あはつはつ。」と笑ふ。

女連は何の事かと眼を回して此方を見返つた。

「や、見給へ、彼方にも思召があると見えて振返つてるせ、土井、何うかして遣り給へ。」

「知らん。」

土井は立腹したやうに、ドン／＼と先へ行く。

「土井君、一寸待給へ。」須田は急足に追付いて、

「何うだい、電車の美人以上だつたかね。」

「謝罪つた、全く僕の目損いだ。」と悄氣返る。

須田は得意らしく笑ひながら、

「君の眼も餘り當てにならんね、して見ると先刻電車の中で見た彼女を、君は確かに秀香女史以上だと云つたが、それも結局目損ひと云ふことになるんだらうね。」

「否、那れ女は確かだ、確かに秀香女史以上だ。」



「那樣ことは決して無い、秀香女史の方が無論上だ。」

「否、電車の女の方が上だ。」

「否、秀香女史だ。」

「何を諍つてるんだ。」此時幸と追付いた茅野は、熱心に云合つて居る二人の肩を打いた。

「おい茅野聞いて呉れ、土井は電車の女を見てから急に秀香女史が厭やになつたさうだ。」

「僕が何時那樣ことを云つた、須田の誤解だ！妄断だ！」

茅野は大聲に笑ひながら、

「土井には到底年増はお齒に合はないよ、底髪でなければお相手が出来ないんだから、考へると可哀さうなものさ。其處へ行くと我輩の如きは確かに一日の長ありだ、袖を引強れば直ぐ出来るやうな那樣甘ツたるいものはもう〜眞平御免、酸いも甘いも噛み分けて、一筋縄では行かぬ程の女を生擒つて、それ

を思ひの儘の絲で操る、其處が戀や色の面白い處なのだ、手を握ツたり、袖を引張たりして直ぐ出来るやうなものは何の趣味も興味も無い、云はゞ猫や犬の戀と同一だ」

「僕のが猫や犬ならば、君のは何だ？」

罵られた口惜まぎれに土井は苛々しなから云ふ。

「無論人間さ。」茅野は事も無げに答へる。

三人は花畑を過ぎて、何時かもう音楽堂の下迄来てしまつた。

「彼方の泉水へ行つて見よう。」土井が先きに立つて広い通路を右へ行くと、二人も無言で其後に跟く。

「今日僕は君等に白状する事があると共に、頼みがある。」と茅野が妙な事を言出した。

「何だい。」と二人。

「秀香女史を手に入れて見たいと思つてるのだ、何うか彼女丈けは僕に任かし

てくれ、頼むから。」

「頼むも頼まんも無いが、果して成功の見込があるのかい。」

「未だ確と有る譯ではない——が、何のその巖をも徹す柔の弓さ、僕は必然關係して見せるよ、實は是迄秘密にして置いたが、君等の目を掠めて、僕が秀香女史を訪問すること既に三回……。」

「何？三回」

「駭くべきものだ。」二人は眼を圓くして墨々と茅野の顔を覗めたまゝ、暫らく言葉が無かつた。

突然氣立たましい音を爲せて、後から自動車走つて来た。三人が慌て、路の片側へ寄ると、夫婦らしい若い西洋人を乗せた其車は風を切つて、三人の前を傲然と馳せ去つた。其餘塵の舞ひ上る裡に、三人は夢みる如く、愕然として立つ。

(十)

夏は月間がてら、涼みがてらの小酌に、毎夜空も無い程賑はしいが、有繋に冬の夜は、汐風に吹かるゝ程の茶人もなく、まだ九時過の宵の口を、三絃の音絶えて、何となく物淋しい芝浦の見晴亭。其海に向つた二階の一室に立籠つて火鉢を前に差向ひ、密々と呷合つて居るのは高村と秀香である。

膳の肴は可なり荒されて、銚子も最う幾本かお替りをした。二人の顔は酒氣に蒸されて火のやうに紅い。

「高村さん、ちやこれからはもう何うしても逢へませんのね。」

其美しい眼元に無限の情を籠めて、流盼に高村を見遣つた秀香は、五月蠅さうに髪のはつれ毛を掃で搔上げ、

「でも迫めてもう一度位可いでせう。」

「そりや逢ふのは可いさ、逢ふのは何も差支無いのだが、然うしたらお互は猶

く離れ難く成るだらう、行末貴女を妻にすると云ふやうな見込でもあれば格別先刻も話した通りな始末だから、若しも此處で決心せずには愚圖愚圖して居りやア、お互の仲は直ぐ世間の噂に上るのは知れて居る、それは貴女がよし構はぬと言つても、僕は僕の地位として、什麼しても那樣事は出来ないます。」

「それは御尤ですわ、貴君は立派な地位のある方、茲人風情の妾が、何うしやうと云つて追付くのぢやありませんし、それにもう近い内奥様も入らつしやるんだし、何も御無理を願ふんぢやアありません、ですけど這塵稼業をして居る丈け、何うか興味に力になつて下さる方があつたらと、何日でも那樣ことばかり考へて居ましたので……それが思懸けず貴君にお見にかゝつたんでせう、其時の嬉しさ、まア甚だつたと思ひです、さらで御最負にして下さる御客様でさへ懐しいのを貴君にお目に懸つて、慙うして度々呼んで戴くんですから妾只もう嬉しくつて、昨宵まで貴君の夢ばかり見つけましたわ。全くの事。」

「それ程、僕を力にして呉れるのは嬉しいが……貴女が神戸から此方へ来たのは、僕に會ひたい爲であつたなど、聞くと、それぢや僕が始終貴女を迷付路せて居るやうで申譯がない、だから……。」

「あら、何も那樣……。」秀香は眼を腫ると、抑へるやうに慙う云つたが、急に又力なさうにガツクリ俯いて了ふつた。

「あゝ充らない、妾が大工の家なんぞへ生れないで、最度良い家へ生れて、さうして那塵怠惰な兄さんを持たなかつたら……。」

火鉢の灰に何か書いて居る。今迄黙して秀香の言葉を聞いて居た高村は、此時弗と又郷里の小學時代のことを思ひ出した、算術の時など机に向つて、荐りと答案を書いて居た昔の秀子、それは正しく這塵であつた、あの那の秀子が……と思ふと、憐れさが先に立つて、又氣強いことも云へなくなる。過ぐる日秀香と連立つて行く姿を、端なく水田大佐に見知られてから、男は断然無關係にならうくと、その方ばかり

考へて居たのであるが、逢つて見れば、然う嘗無くも云ひ切れぬ、何うも断然云ふに忍びぬ、……高村の心は茲に至つて又惑ひ出した。

二人は相對して俛いたまゝ暫くは無言であつた、階下には新たに客が來たらし、酒に酔つてゐるらしい男の聲や、奔走つた女中の聲が手に取るやうに聞える、秀香は氣が付いたやうに姿勢を直す。

「妾這麼愚痴なんか零して了つて……ねえ、高村さん今夜は態々來て下さつたのに、這麼充らないことばかりお聞かせ申して済みませんでしたねえ、もう充ない事を云ふのは止ませう、そしてせめて、今晚丈けでも面白くお話しませう。」

思ひ諦めたらしく云つて、傍に置いてあつた盃を取るなり、呷と飲む。

高村も亦盃を手にしながら、

「僕は何處迄も貴女に同情してゐるのだから……。」と云ひさして、盃を口に當てたが、一口飲むと、苦味さうに顔を顰める。

「さアお熱いのを……。」秀香は自分の盃を高村に差し渡して波々と注ぐ。

「妾なんか何うせもう廢物ですからね、何う成つたつて介やアしませんわ。」

「那樣ことがあるものか、そりや一旦商賣をした身体だから、堅氣になるのは難かしく、併し藝人として一生を送らうと思へば、將來開拓の餘地は充分にあるんだからね。それに藝人と云つた處で、昔とは違ふ、今では藝術家と云ふ立派な名家が出來て居る、それで身を立てやうと思へば随分立てられぬことも無い、まして貴女は質の宜い人なのだから、屹度成功出來る、だから那樣自暴自棄な事を言はないで、大に遣り給へ、若し貴女が然うする心持があるのなら僕も亦及ばずながら、盡力しやう。」

「那樣御心配かけては済みませんわ。」

感謝の眼に昵と高村の顔を見たが、「でも藝人風情の女と這麼ことしてゐるのが、もし世間に知れましたら、自然御身分にも障りませうが……。」

「宜いことはありませんわ。」

「構はんさ、それが爲め兎や角云ふものがあるならば、それは云ふものゝ誤解だ、云はゞ自分は只舊友としての交情を温むるに過ぎないのだ、これが女だから彌喧しいが、男であつたら何の不思議も無い！」

感情の冷熱は妙なものである、今迄自分の身を標準に置いて考へて居た高村は茲に至つて其心が寧ろ秀香を中心とするやうになつた。

「那樣こと有仰つて貴君、そりやア違ひますわ、妾が女であればこそ可けないのですわ。」

「何故女ぢや可けない？」

「だつて貴君！」

秀香は言葉を途切らして尻と男を見たが、高村は何處迄も眞面目に云つてゐるらしい。

「おほ、」と、女は遂に笑ひ出した。

「何だ？何が可笑しい？」

憊う云ひながら高村も亦何が無しに笑ふ。差しつ押へつ飲む内に、酔は何時か全身に廻つて、二人はもう細々しい話をする根も盡きた。

「ねえ貴君もう止ませう、理屈なんか止して丁つて、何か面白い話でも爲ませう。」

「然うだ。」高村は又更に杯を取る。

話は旋て掛川の昔懐しさが繰返され、それから神戸の懐舊談に花が咲いて、調子に乗つて干した盃の數さへ分らぬ位、二人は殆ど前後を忘れる迄に酔ひ亂れた。

(十一)

節は既に立春を過ぎたが、餘寒猶一入の嚴しさを加へて、朝な夕の厚氷、堅く水の表面を封するが、纏て霜消え、氷も解ける十時となると、ぬくぬくと春

の日影が南様の障子へ一杯に映つりて部屋は眩しい程明るくなる。絹子は昨宵時ならぬ來客に夜を更かして、今辛と臥床を離れたばかりである。正午過には人を訪ねる約束もあるから、遅々しては居られぬが、今まで心ろならず打捨てあつた静間芳子と云ふ四國に居る舊友へ、手紙の返事を出さうと思立ち、食事すると間も無く小窓の傍の机に坐つた。

伊太利製の美しくしい絨毛氈に蔽はれたる机の上には、硯、筆榻、文鏡等の文房具が並べられて、其傍には金字の入つた洋装の書籍が二三冊、それに新刊の女學雜誌も一二冊積まれてある。本と硯の間に一枚の名刺——それには毎朝新聞文藝記者浦波彦吉と記されてある——が置いてあつた。絹子は早くもそれに氣が付いた。

「おや、誰が持つて來たのだらう。」

折能く女中のお仲が縁側を通つたので、絹子は呼び入れて、

「仲！この名刺の方は？」

「はい。」と、今障子を開けたばかりのお仲は、敷居際へ突膝する。

「それはあのう、先程被入しつた方なので……。」

「何うして？待つて居たの？」

「いえ、未だお寐みで居らつしやいますと申しましたら、では又上るから宜しく有仰つて呉れと、それを置いてお歸りになりましたので……。」

「まあ然う？歸つたの？些ツとも知らなかつたわ、仲、お前、待たして置いて呉れると可かつたのねえ。」

絹子は殘惜しさうに云ふ。

「おや、然うで御座いましたか、つひ存じませんものですから……何うも相済みませんで御座いました。」

婢は其儘下る。

と、絹子は墨を磨りかけて居た手を休めて、又思出したやうに名刺を手に取り「浦波さんも随分な方ね、折角被入つて逢はずに歸るなんて。」

獨言を云つた絹子は這座事を思つて居る。

逢はずに歸るとは餘りである、始めて来たのではなし、假令自分が寝て居やうと、折角此家まで来て置きながら歸らなくても可さうなもの、併し名刺で見ると何か社の用であるらしくも見える、何の用で来たのであらう……。色々考へる中、絹子は弗と父の關係から自分も發企者の一人として、數日後に催す筈である海員救濟會寄附の慈善演藝會のことを思出した。其開催の順序、出演者の姓名、入會、申込の多寡等に就いて話をする約束を二三日前にした、大方それで来たのであらう、若し然うなら尙更のこと待つて、呉れ、ば宜かつたのだ、それに恰ど自分も演藝會の事について聞きたいこと、話したいこともある、それなのに黙つて歸るとは……。

「宜いわ、此度來たら散々密めて遣るから……。」  
悠う云つて頬のあたりへ笑を浮べたが、此時絹子は胸の裡に浦波の風采を描いて居た、常世肌の、話上手の、氣品こそ高村に及ばぬが、妙に人を引付けるや

うな處がある、それと云ふ程の學歴も無いが、天稟の才能は其の缺けた處を補ふて、今では文壇でも多少人に知られて居る、高村が他人に分らぬやうな地味な事業とその研究とに耽つて居るのと反對に、浦波の爲る所は、凡て潑刺とした仕事で、打てば直ぐと社會に響く。自分も然う云ふことが大好きである、然う云ふ人が大好きである……。

と、思ふと絹子は自分の過去を回想された、突飛にも俳優とならうとした事を思出した那樣考は今最う些ツとも無い、併し自分の理想としては、他くまでも然う云ふことを希望する、地味な陰鬱な生活は爲たくない、寂しい田舎に住まはねばならぬやうな那樣境遇には成りたく無い。

絹子は又苻友から來た手紙の返事を書かねばならぬことに氣が付いた、手紙が來てからもう二週間餘にもなる、絹子は自分の返事を待ち飽ぐんで、定めし友達甲斐の無いこと、怨んで居やう。何時も手紙には物寂しい田舎ではあり、友達が無くつて寂しいくと、那樣事ばかり云つて寄來すが、夫なる人の職務上

餘儀ないとは云へ、華美好きな活潑な舊友は、能くも田舎に辛抱して居ること  
だ、東京に居る時分は歌舞伎座が面白いと云つては自分を誘ひ、本郷座が開い  
たと云つては自分を勧めた、二人は逢へば何時も演劇の話で持切りで、筋の批  
評、俳優の巧拙、舞臺が那の、道具が怎うのと、那樣なことはかり話して居た  
俳優にならうといふ考を起したのも其時分である。然うだ、那の時分、恰ど活  
人畫が流行して、二人共夢中になつて居たこともあるが、それも最う三四年の  
昔となつてしまつた。舊友の織子さんも恐らく最う那の時の元氣はあるまい、  
四國の片田舎なんぞへ行つてしまつて、嘸充らないことだらう、自分は何うか  
那樣運命に落ちたくない。假令高村の妻となつても永久東京に居たい、東京の  
土を離れたく無い……。

止め途ない空想を繰返して、絹子は暫く恍りしたが、磨り懸けた硯の水はいつ  
か乾いて、巻紙にはまだ一行も筆を着けてないのである。

(十二)

豫て噂のあつた海員救濟會寄附の慈善演藝會は、愈よ二月十一日、紀元節の午  
後一時を開會に、明治座に於て催された。  
發起者の熱心な勧誘と、番組の取合せの面白いのが、尠なからず一般の人氣  
を聚めて、一、二等から三等迄の入場券は、前日迄に悉く賣切れとなつたと云  
ふ凄まじい景況。  
會衆は定刻前から森々と話懸けて、さしも廣い劇場も殆ど立錐の餘地もなかつ  
た。發企人の満足は云ふ迄も無く、各其妙技を示さうとする出演者も、亦満足  
した。技は取り／＼に面白かつた、別けて満堂の大喝采を博したのは、青柳秀  
香の筑前琵琶と鬼丸の浪花節。  
實に世の嗜好程變り易いものはない、一時音曲界では飛鳥を落さんばかりの勢  
であつた義太夫節は、今漸う蹴落されて是迄野卑なもの、詰らぬものと世間か



七十二  
ら卑下されて居た浪花節が、却つて世人の傾聴に價するやうになつて來た。此風潮を巧みに利用した此演藝會の成功は素よりであるが、併し秀香女史の琵琶其物は、決して浪花節の如く而く世の勢力となつて居るものではない、薩摩琵琶の方は是迄とても多少世に歡迎されぬことは無かつた、その昔は九州の燈音でのみ謳はれたものが、都の職人連の意氣な咽喉に眞似らるゝやうになつて來た、けれども其勢力は至つて微々たるものである。況して其分派たる筑前琵琶に至つては、多くの人々は恐らく其名を聞くのでさへも近頃であらう、されば秀香女史の技は決して世間の風潮に依つて喝采され歡迎せらるべきものでは無かつた、とは云へ其婀娜たる風姿は、近頃入京したと云ふ噂と共に、著しく觀客の視線を集めて、其妙音と巧みな節廻しとが、優しい口から響いた時は、満堂肅として宛から水を打つた如く、聴衆は只其美に打たれて、一時恍として魂を奪はれたやうになつたのである。

散會後、發起人なる貴婦人の一團が、茶屋の二階に集合して晚餐をした、めた時、秀香女史の名が又更に一同の口に繰返された、然うして女史を推奨した某夫人は、八方から秀香の事に就いて色々問はれた。併し某夫人は只、近頃關西から上京したと云ふ世間の噂と、去る紳士から紹介された、と云ふこと丈しか言はなかつた、其以外を知らなかつたので。

發企人の一人なる絹子も秀香女史を熱心に稱揚した。晚餐が終つたのは日暮頃。絹子は迎ひの俵に乗つて麻布へと急がせたが、途々も心に懸るのは、今日會場に来る筈である高村が、何うしたのか散會まで到頭顔を見せなかつた事で、何故來なかつたのだらう、止みがたい用事が出來たのか、それとも急に病氣にでも成つたのではあるまいか！幸ひ大した廻り路でもないからと、氣に懸るので其本村町の下宿を訪れて見ると、先刻人が來て一所に他出したと云ふ、絹子はガツカリしたが別に病氣でも無かつたので、安心して宅に戻つた。

戻つて見ると浦波が待つて居た。先刻から待つて居ると聞いて、絹子は高村の

不在へ訪ねた失望を償はれたやうに喜んだ、で女中に吩咐けて浦波を居間へ通させ、そこへ衣服を着替へて會つた。

挨拶が済み、茶が運ばれて、二人は今眩いばかりな電燈の下に、火鉢を間に相對して坐つて居る、浦波は例の脊廣姿で、窮屈さうに座蒲團の上へ跪座つて巻蓑を煙らせながら、

「大分御悠りでしたな、何方へかお廻りぞ？」

「はい、一寸一軒立ち寄りしましたが、併し演藝會の方が案外時間が費りましたので……………」

「そりや中々御骨折でした、併し今日の會は大成功でしたな、那の雑沓つたら實に無かつたですな。」

浦波は巻蓑の灰を火鉢の縁に拂いて、竊と絹子の顔を偷見る。

「お蔭さまで皆満足しました。併し那した人氣が出たのも、鬼丸の浪花節と、秀香の筑前琵琶、あの二つがあつたからでせう。」

如何にも嬉しさうに、微笑む。

「全くです、全く那の二つが呼物になつたのです。殊に秀香女史の評判が盛んのやうでした、拜見に行つた我々一同業者でも随分騒ぎになりましたよ、明日の新聞には屹度秀香の事を盛んに書立てることとせう。」

「甚麼經歷の人でせうか、貴君方などは職業上もう御調べになつてお有でなんでせう……………」

「否、それが何うも分りしませんので……………曾て同じ名で神戸に藝妓をして居たと云ふ事丈は聞きましたか……………尤も其時分から琵琶の方は得意であつたさうです、今日の様子では、愈よ人氣が揚るばかりでせうな。」

「然うでせうね、何でも名を賣るには藝人とか文士とか、然う云ふのに限りませぬわね、貴君なんか本當にお羨ましく御座いますわ。」

「や、我々ですか？」浦波は面喰つて顔を少し赧めながら、「何うも恐入りますな、私なんぞ名ばかりの文士で、何も書けないです。が、兎に角早く名を賣

るのは文藝に限ります、併し文藝と云つても色々主義があるから、時勢にも依るでせう……例へて申せば今日の鬼丸の浪花節ですな、御承知の通り那れが今非常に勢力を得て來ましたが、昔はまあ職人以外に兎や角言ふ者はなかつたでせう、それが此二三年來の景氣つたら何うです？、人氣の變遷位不思議なものには有りません。」

「本當に不思議ですわね。」

浦波は平素の懐抱を語るべき機會が來たので、如何にも愉快さうに、

「實は私先日も其點について考へたことがあるのです……。」

「甚麼御高見で？」

「お聞き下さいますか？實は我々の新説——まあ新しい意見の意りなんで

すが……。」

「然う、では是非聴かして戴きませう。」

絹子の望ましげである様子に、浦波は愈よ得意の鼻を益かす。

「時勢の推移に就いてですが、例へば先刻の義太夫と浪花節との關係ですな。那れを例に取つて考へて見ますと、義太夫が衰へて浪花節が盛んになる——

さうすると浪花節の勢力が義太夫を壓倒したやうに見えますが、我々はそれを事實と認めないので。我々が其興亡盛衰に對する解釋の見地は、全然世間とは異なつて居るので、我々の見る處に依ると、時勢の推移變遷と云ふものは、

さう云ふ外形上の事實でなくつてそれ等の思想の根本に貫流する時代の波濤

——事その海の事に譬へてお話し爲ませう、那の大洋の波濤、大波小波の起伏

する状態は、應て時代の變遷と同一に見られるのです、其上に浮んで居る木の

葉でも、木屑でも、乃至舟でも何でも、一旦波が來て潮が高まると、それと共に、

凡て浮いてゐるものは、高き處まで持上げらるるでせう、併し波が去ると共に

今度は低い處へ落されてしまふではありませんか、で、それが波の爲めに

動力を得た結果かと思へばさうではない、波濤の去來如何に關せず、物體そのものは

矢張原の地位に残されるではありませんか……何うです、此

物體そのものは矢張原の地位に残されるではありませんか……何うです、此

物體そのものは矢張原の地位に残されるではありませんか……何うです、此

物體そのものは矢張原の地位に残されるではありませんか……何うです、此

點に就いてはお分りでせうね……。」

「え、能く分ります。」と、絹子は瞬もせず、熱心に聞き惚れて居る。

「處で、所謂時勢の潮流……究り潮流と云ふからは、其原則は波濤のそれと同一でせう、浪花節が盛んになつて義太夫節が衰へる……もつと大きい例を云へば、歐化主義が亡びて國粹保存主義が起り、それが衰へて帝國主義、世界主義が種々に變つて行く、それは結局それ等のもの自體の興亡ではなくて、其内部の生命たる時勢の潮流の起伏に伴ふて、それに相應した主義主張と云ふものが生滅起伏する状態なのでありませう、偉人は時代の産物だと云ふ言葉は、此意味から言ふと、尤も適切に解釋が出来るだらうと思はれます。格別新しくも無い説を、浦波は卷裏を嗅かし、得意になつて語り續けた。火鉢の隅には其の吹殻が縦横に亂れ散つて、室内は濃々たる白煙に掩はれ、電燈の光さへも稍霞んで居るやうだ。絹子は酔はされたやうになつて、今更の如く浦波の顔を凝と眺める。

(十三)

何時もは廣尾橋から電車に乗つて、芝の下宿へ歸るのだが、今宵は二三日來吹通しの風も歇んで、月も好く、外套を纏つた方は左程寒くも無い處から、浦波は電車の乗換が度々ある面倒さに、弗と歩いて歸らうと云ふ氣になつた。

で、其儘方向を換へて南部坂を本村町の通に出る。

道は寂しい町家続き、まだ宵の中だが家々の戸は多く鎖されて、軒の瓦斯燈月に淡く往來の人も稀である。浦波は俯いて自分の影法師を追ひながら、歸る時の絹子の態度など、考へるともなく胸に浮める。逢つた時の嬉しさうな様子、談話に聞惚れて恍惚としたやうな美しくしい笑顔、歸るのを殘惜しさうに見送る時の眼色、まだ浅い交際でありながら、絹子は何故あゝ迄自分を歓迎して呉れるのだらう？、文藝上の趣味嗜好が一致して居るとはいへ、それ以上に他の意味が含まれて居るのではあるまいか、那の眼、那の態度、何うも無意味とは思

はれぬ！假令自分が思ふやうな事を胸に秘めては居ないにも爲ろ、那の眼、那の態度、何うしても意味がある………が、然し絹子には男が附いてゐる、最初それを吉野から聞いた時は半信半疑で居たが、其後更に精探して見ると、全く絹子には約婚した男がある、それが何で自分に對して那麽素振を爲るのだらう？、豈か翻弄するのではあるまい、那様事はない、何うも絹子は自分に情があるやうだ、と云つて然ういふ道ならぬ思を抱くやうな女とも受取れぬ。

浦波は道廢ことを考へながら道を急いだ。間もなく本村町の交番の前へ出ると直ぐ向ふの狭い通りを暗闇阪の方へ曲る。道は愈よ寂しくなつた。彼は又絹子の事を考へ出す。

自分は俯く迄も絹子の道義的良心を信じて居る、所天たるべき人がありながらあだし心を懐いて居やうとは何うしても考へられぬ、併し人の感情を杓子定規に解釋することは出来ないから、或は所天たるべき其人に不満があつて、其煩悶の慰藉を得やう爲に、那して自分を歓迎するのではあるまい乎。然う思つて

見ると、氣の所爲か、其様素振の全く見えぬでもない、果して然うなら………事實然うならば氣の毒だ！、那麽勝氣の性質で居るから、心にもない結婚をする………、實に氣の毒だ！、成らば自分の力で救つて遣り度い、救ふことが出来ずば、迫めて慰藉だけでも與へて遣りたい………が、これは餘り付度に過ぎて、唯絹子は何となく自分を思つて居て呉れるのか知らず、浦波は絹子と差向つて話した光景を顯然と胸に描く。

自分は絹子の前に坐はると何時も不思議に胸が躍る、唯最う嬉しくなつて、語るにも聞くにも何が無しに興味を覺える。毎も話に氣を奪られて、昵と自分の顔を瞞めて居る時の皆、笑ひながら物語る愛くるしい其口元、膝の上へ雜誌など置いて、些し俯き加減に見て居る時の其姿、呷！、自分は近頃何うして慙う絹子のことばかり思ふやうに成つたらう？………。

空は晴渡つて、丁度藍墨色の水を張詰めたやう、冴えた月からは冷水が滴りさうだ。彼方此方の木立は瞭り黒澄んで物凄く、道傍の家の窓から映す火影のみ

温かいやうで人懐かしい。其外は唯妙に寂しく静な晩である。

「戀だ！絹子に戀してるんだ！」

心に憊う叫んだ浦波は、今度小聲に、

「馬鹿な！主ある女を戀するなんて……………」

月を仰いで冷やかな笑を浮べる。

幾ら思ひ込んだ所で主ある女だ、到底逃げらるべき戀では無い、逃げられるに

してからが、自分は他人の女を奪つて何うする縦し小さくとも己は抱負がある、

低くとも希望がある！自分はそれを捨て、迄、道ならぬ戀をする程意氣地無な

男ではない、自分は平素他人に對して竊に其冷静を誇つて居た、それが絹子の

爲めに困迷した、失心した、馬鹿だ、實に馬鹿だな……………」

道は何時か緩々下りになつて、浦波は今暗闇の上へ出た、月は木立に隠れて

道が急に暗くなる。

「併し快活で美しい女だ、戀するのは愚だが友人として交際するは、宜い！」

浦波は早め出した足を急に又緩くして、自分で辨解するやうに呟いた。

又しても浦波は絹子の事を思ふと與に、己の現在の状態が電の如く煌いた。

地位と云つた處で、云ふにも足らぬ文藝記者、身分、資産、其様ものは素より

無い、自分は今憐れな下宿生活の身だ。渾てに於て絹子とは懸隔が甚しい。

然う思つた時、浦波は耐うなく寂しかった。平素無上の權威を信じ、他人にも

語つて居た文士の境遇の、弱い、力無い所が染々と思はれて、便無い、心細い

思が胸に充ちる。不遇にして世を卒へた文學者の身上などを思ひ浮べながら、

我とも無く歩いて居ると、阪は何時か平地となつて開黒な立木は明るい町の家

並と代る。

浦波は十番の通へ出た。

(十四)

今宵は七面天の縁日なので、不斷さへ賑やかな十番の通りはいと賑かである。

浦波は夜の國から晝の國へ來た思ふ。  
 狭い道路の兩側は、大道商人の店から店と續いて、人は押しつ押しされつ行く。  
 今迄餘り空想に耽つた浦波は呆氣に取られて、暫らくは佇立んだま、眺めて居  
 たが聽て其群集を押し分けて、自分も其中の一人になつた。  
 押され〜て浦波は次第に阪下の方へと歩いた、今は絹子のことも自分のこと  
 も考へる處ではない、只道の兩側に並んで居る露店を無意味に眺めて行つたが  
 弗と行く手に喧嘩のやうな聲が聞えた。  
 群集は一樣にその方角へ向けて走る。踏む、押す、蹶る、往來は一時に沸き返  
 るやうな騷擾となつた、押すな〜と云ひながら、互に押しに行く。往くにも  
 戻るにも狭い通りで何うすることも出来ないから、浦波も爲方なしに押されて  
 進む。  
 「ア痛ッ」と、行成浦波の前に居た學生らしい男が叫んだ、浦波が押される拍  
 子に足を踏んだのである。

「何うも失敬」彼は詫びると與に、立止まつて足に力を入れ、身を反してグッ  
 と後の方へ押返す。  
 「ま、痛いのでえ。」今度は後の方で女が叫ぶ。  
 「や、何うも失禮。」浦波は重ね〜の敗北に小さくなつて側へ寄つた。  
 「茅野さん」と、肩掛に首を埋めた庇髮の其女は、學生の直ぐ後に立つて聲を  
 掛ける。  
 「随分込みますね。」  
 茅野は振返つて女を顧み、  
 「今足を踏まれた、未だ痛い。」故と浦波を見たので、彼は其儘外方を向いて了  
 ぶ。  
 「妾も。」と、今度は女が顔を向けたらしいので、浦波は見るともなしに見ると、  
 意外にも其女は青柳秀香！  
 若い學生と秀香と何か仔細あるらしく見た浦波は、自分の受持ではないが新聞

の好い種だ、と歸るを忘れて其後を跟ける。

「茅野さん、もう一所になんか歩きませんよ、妾懲りくしましたわ。」

「懲りくしたつて？何です、何に懲りたんです。」

「貴君と一所に歩く事ですわ、妾が那れほど云つたのに、到頭一所に来て了つて、随分酷う御座いますのね。」

「跟いて来たのは僕が悪い、それは悪いに遠くないが、何も懲りくしたなんて云はなくとも宜いでせう、途中で何も不都合をしたのではなし……。」

「あら、何も然う云ふのではありませんわ、だつて妾見たいな道麼お婆さんが、若い貴君を引張つて歩くのは、餘り見可い圖ぢやアありませんもの……。それに貴君だつて學生でせう、若し道麼ことして居て學校へでも知れると大變ぢやアありませんか。」

「は、あの御忠告と云ふ譯ですか、併し僕の學校は私立ですから其様心配は要りません、貴女逃げる意りなのでせう……。」

「何も逃ることはありませんわ、けれども妾だつて困りますわ、第一貴君のお友達にでも見付つたら、妾面目ありませんよ。」

「同宿の奴ですか、那麼奴等は何も恐れるには當らんです、土井でも須田でも僕に對しては、一言も楯つくことは出来ないのです、假令楯を突いた處で、僕の一喝で澤山です、決して恐れるに當りませんよ。」

「そりや恐れる必要は無いでせうけど、那して三人で居らつしやるのに、貴君とばかり道麼に親しくするのは、それは貴君は何と云ふお考へは無いにしる、世間が煩さいものです、ですから、これから宅の方へ遊びに入らつしやるにも、何うぞお二人連かお三人で入らしつて下さい、さうでないとな妾本當に困るんですから……。」

「は、其様こと云つて、貴女誰にか……土井にでも僕の悪口を聞いたのでせう。」

「那樣こと知りませんわ。」



「否、聞いたんでせう、聞かなければ、今夜に限つて何も然う、急に愛憎を盡さないでも宜いぢやありませんか。」

「おほ、愛憎を盡かすなんて、其様ことは有りませんよ、第一聞いたの聞かないのつてそれからして、分りませんもの……。」

「聞かんければそれで可いですが……併し青柳さん、此處までお話ししたら僕の苦心も多少酌んで呉れるんでせうね。」

「貴君の苦心？」

「然う、分つたでせう、ねえ、酌んで呉れるでせう。」

「什麼も妾には貴君のお話が薩張飲込めませんよ、ですから其様話は何れ悠り伺ふとして、それよりも、憊うしてお茶菓子のお土産もあるんですし、早く歸つて他の方も招んで、猶敷面白い話をしやうぢや有りませんか。」

「そりやア可いですが、僕の苦心が分らなくつては困りますね、全く分らんですか。」

「えい。」

二人は今、町の雑沓を脱けて、人通りの妙な狭い路へ入つた處だ。

「ぢや、最度分るやうに爲ませうか。」

此時稍後れ氣味に歩いて居た茅野は、憊う云つて目忙しく四邊を見廻したが、縦々と、肩の擦れるばかりに秀香の傍近く歩み寄つた。

「僕の苦心と云ふのは……。」

云ひながら茅野は今迄懐手して居た其右手を伴すと、實如秀香の入口を抜げて其節くれ立つた手に、優さしい女の二の腕を摺んだ。

「何を爲さるんです。」秀香は男の手を振ほどいて二足三足前へ駆けた、拍子にぶつり下駄の前鼻緒が切れる。

通擦りの二三人は秀香を取巻いて、何やら頻りと囁き始めた。

茅野は最う其處に居た、まれなくなつて、行成元來た道へと逃出したが、其機に面喰つて後に立つて居る浦波に突當る。

「ヤ、失敬ッ」と、言捨てるなり一目散に座出して、姿は縁日の群集に紛れた。

九十

(十五)

茅野は、有繁に面目なく、直ぐ家へ戻る事も出来ないので、飯倉に居る學友を訪れて雑談に時を移し、十一時過ぎて家に戻ったが、隣の秀香女史の家は無論、自分の家の久山でも表を閉めて寐て了つた。

毎もは無遠慮に叩き起す茅野も、今夜は居候が歸つたやうに静に宿の者を起し、辛と二階へ上り懸けたが、日頃背張である二人も最う寐たのか、静かである茅野は訝しく思ひながら上つて見ると、芯を細めた置洋燈が机の上に薄暗い光を放つて居るばかり、何處へ出掛けたのか二人の姿は無い。

「チヨッ、留守か」呟やきながら、洋燈の芯を振つて明るくすると、火鉢にかゝた土瓶を下して、其灰を搔廻して見た。外出してから大分時間が経つたと見えて、丁寧に埋けた火も殆ど灰となり、只一ツ烏瓜程のが残つて居る。

茅野は袂から取出した巻蓑に火を付けて、スバ／＼と喫かしながら、考へることもなく暫く時を過ごしたが、其内階下のボン／＼時計が打ち出したので、机の上の目覚時計を見ると、十二時十分前だ、二人はまだ歸らぬ。「素見にでも行つたのか知ら。」と呟いた。

茅野は今夜の不始末を思ふまいとして、先きからそればかり苦にして居る。

夕刻秀香女史を訪ねる時には二人の前を威張つて出た、それにも拘はらず先刻の那の醜態は何うだらう、二人が居ないから宜いやうなもの、居たら甚麼に翔られる事だらう……。

今に二人が歸つて來たら、今宵の首尾を根掘り葉掘り聞かれるに決つて居る、一時の虚構を云つた處で、相手は目と鼻の間に居るのだから直ぐ後から曝れるに極つて居る、何と云つたものだらう、何う辯解したものだらう……。

幾つて居た僅かな火も灰となつた。茅野は懐手しながら子然として考へに沈む。「何も出来てしまつた事だ、考へたつて始まらん。」

九十一

獨言だが、應て疲勞さうに伸をすると「あゝあ。」と大きな欠をする。時計はもう十二時を二十分過ぎた。

「歸らんのかな……最う寐やう。」

夜具を敷いて、洋燈の芯を細めると、充らなさうに床の中へ潜り込む。

稍暫く顛轉反側して居たが、何時の間にか睡氣がさしてトロリとした。

「茅野々々。」夢で刑事巡査に呼止められ、驚いて眼を開くと、枕元に須田と土井も坐つて居る。

「何時歸つたのだ？」

「今だ。」

二人は何處で飲んで来たのか、クデ〜に酔つて居る。

「飲つて来たね、何處で飲つた。」

「何處？はつ〜はつ、君の暢氣にも呆れるね、僕等は今夜一大事件を發見したのだ、而かもそれが君に大々的關係を持つて居るのだ。」

土井は眞面目腐つた茅野の顔を覗きながら、

「君はまだ知らんと見えるね」

「何を？」

「何も糞もあるものか、重大事件よ。」

須田も夜着の襟を揺ぶりながら

「須らく起きるべしだ、荷くも事自分の身に關してゐるのに、寢て居て聞かうと云ふのは不都合ぢやア無いか、横着至極と云ふべきだ、おい、茅野、左も右も起き給へ、須も跳ね起き給へ。」

「起きるよ、起きることは起きるが……」

茅野は夜着を着て蒲團の上へ坐る。

「僕に關する一大事件といふのは何だね」

「はゝゝゝ知らぬが佛とは君の事だね、おい、茅野、一寸訊きたいが秀香女史は何うしたね」

扱ては茅野も思はず慄然としたが、然り氣なく、  
「何うしたつて？ 僕は一緒に七面様の縁日へ行つて来たのさ。」

「行つた？ 縁日へ？」と、土井は眼を澄つて、

「嘘を云へ、證據は既に僕等の手にあるのだ、那様に濟すと素破抜くぞ」  
此調子で稍安心した茅野は、

「何を？」と土井を見る。

「逃られたらう！」

二人は夜更けも忘れて大聲に笑つた。

「何うだい、圓星だらう、有繋の自稱色男も茲に至つて其價値零となんぬは中々振るつてるね。」

「おい茅野、其様變挺な顔をせずと、早く兜を抜いで、降を軍門に乞ふべし。僕等は今君の爲めに、重大な事實を話す意りなんだよ、だから逃けられたら逃られたと、勿々と自白して下し給へ。」

須田も土井に續いて同じ事を云ふ。

茅野は又不安になつた。

「逃られたとか、自白しろとかつて、何うも君等の云ふことは僕に分らんよ」

「愈々石地藏かなア。」

二人は相顔みて笑ひ轉ける。

「冗談ぢやない、彌るのも宜い加減にして置き給へ。」

茅野は稍腹立ち氣味で云ふ。

「おい、茅野、何も然う怒らんでも宜いよ、僕等は友人として君の爲めに大に憤慨に堪へん事實を探知して来たのだ。君はまだ知らん様子だが、那の秀香女史は到底君のお手に合はんよ、那の女にはちやんと情夫がある……。」

「情夫が？」茅野は我を忘れて眼を瞪る。

「實はね、今夜君が隣へ行つた後で、今頃は君が秀香女史に對して大に手腕を振つて居るのだらうなぞと思ふと、實際焦けて耐らなかつたのさ、其處へ恰ど

國から爲替が届いたのだ、え、癪だ、遣付けちまへといふ譯で、到頭君、自炊費の豫備金を撥んで赤阪へ飛出したのさ、所が君驚くぢやないか、彼處の求友亭に秀香女史が居つたのだ、而も情夫を噛へ込んでるぢやないか。」

「……………」  
茅野は先刻の失敗と思比べなから、片唾を呑んで聞いて居る。

「僕等幾ら君の態度が癪に觸つたからつて、其様状態を見せつけられちやア好い心持はせん否、大に癪に觸つたね、で、二人して飲んで、騒いで、ウンと暴れて遣つたのさ。茅野、残念ぢやないか、高が琵琶弾きの那麽女に馬鹿にされて、此儼黙つて了ふなんて餘り氣が利かん、何うかして彼奴を取占める工夫を爲やうぢやないか。」

「大に遣るべしだ。」須田も同じる。

「然うかなア。」力なさうに茅野は俛れて、先き手強く自分の要請を卻けたのも、究り然うした譯がある爲めかと、又それからそれへと考が走る。

思ひ／＼の心に三人は互に顔を見合つたまゝ沈黙となつた。  
急に俛の走る音が聞え出したが隣の家の前まで來るとパツタリ止まる。三人は耳を聳てた。

(十六)

午砲が鳴ると與に、食堂開始の鈴を聞いたのは、彼是もう三十分前だ。  
海軍省三層樓上の一角を占めた其事務室の椅子に倚つて、熱心に新造軍艦の設計案を調査して居た高村は、恰ど用務の一齣を卒へたので、今後れ馳せに階下の食堂へ入つて行つた。  
幾十となく並べられた食卓の八分は既に狼藉として、肉刺、小刀、皿、小鉢の類が縦横に入亂れて、雪の如き卓子掛には、處々汚點らしいものが附いて居る。食堂ひろ／＼とした大廣間だが、食器を取片付ける給仕の彷徨する外は、後れて來た五六の人が、一團となつて、卓子を圍んで居るばかり。

高村は給仕の案内に俾れて、窓際の一番明るい椅子に腰懸け、硝子越に射す日の光を背に浴びながら、ピフテキの皿を前へ引寄せると、やをら肉刺を執る。

「大分御悠りですな。」

二三席離れて、向側に坐つて居た五十恰好の將校が、肉刺の手を休めて、莞爾した顔色で高村に聲懸けた。其人は水田大佐である。

「お、些少も存じませんで……」高村は丁寧に挨拶して、「貴君も御悠々でしたな。」

「や、軍務局の方は何時も不変の多忙で、はつくはつく。」

大佐は磊落に笑つたが、高村の食事を控へて居るのに氣が付くと、

「さあ遠慮なく遣り給へ。」と、自身先づ手にしてゐた肉刺の尖頭に一樹の肉を刺しながら、

「何うです、例の新造の計畫は進行して居りますか。」

「は」小刀を執つて肉を刻んで居た高村は、大佐の方を向ひて、

「目下着々進行中です、何れ近い内には確定案として回議に附する運に参らうかと思ひます。實は只今も其方に懸つて居ましたので……。」

「や、然うか、それは御苦勞ですな。近頃は兎角世の中が物騒でな、少し油断して擴張や改良を疎忽にすると、直ぐ其勢力が落ちて了ふからの、それに艦型はとしく變更して行くし、機關も年々のやうに改良されるもの、愚圖々々して居ると、直ぐ世界の大勢に後れて了つて、いざと云ふ間に飛んだ不覺を取るやうになるからの。」

二十七八年戦役當時には四千噸位の巡洋艦で敵の七千噸の戦艦と戦つた事、十年後の日露戦役には、双方共一萬數千噸の大戦艦で對抗した事、究り艦型は年々其大を加ふる許りであるといふ事、それから英國の大戦艦トレッドノート號の事や、薩摩艦の話、巡洋艦の任務を兼ねた大形驅逐艦の新造が、盛んに各國で經營される事や、潜航艇の話などが一寸出て、

「何しろ忙はしいですな」と高村が言つた。

「いや、實に忙はしないことだ、その方へかけては我々は門外漢だから、先づ君等の方で充分に研究し計畫して貰はんではな。併し君の如き俊才にしてしかも研究に熱心な造船官があるのは、我海軍部の幸福さ」

「然う御世辭を振撒かれては火に痛み入ります」

「御世辭ではない、全くの話だ、陸軍と異つて海軍は人間よりも軍艦そのものが第一の生命なのだから、其進歩改良を圖ることは實に海軍の重大案件だ、其造船計畫を立てる君等の地位は、究り我海軍の中樞神經さ、我々如き末梢神經を掌る者とは全で異ふ」

「然う持ち上げられては、何とも申しやうがありません」

「其様ことない、が、併しいざ戦争となると、全く我々末梢神經の舞臺となつて、やれ敵艦を沈めたの、捕獲したのと、世間からはワイ／＼騒ぎ立てられるし、自分達も乘氣になつて鼻を益せるが、其功績の大半は君等造船官のものさ。それを君等は陰へ廻つて黙つて見て居るんだらう、考へると氣の毒だな」

「いえ、其様ことは斷じて有りません、我々は——尠くとも自分丈は何とも思つて居らん意りです。我々の誇は然う云ふ方面では無く、寧ろ學術上の新研究、新發明と云ふやうな點にありますので、科學の最新研究を採つて理想的艦艇を建造すると云ふやうな——我々は其處に希望も榮譽も持つて居るので……。」

「や、然うたらう、然うに違いない、我々如き消防夫連の立廻り役とは異うから。」

大佐は恁う云つて、感心したやうに高村の肉を煩張つて居る其姿を眺めて居たが、

「お、高村君！」と、急に何やら思出したらしく、「例の名和の一件ね、那れは何日頃極る意りかの、二三日前母親が来て、遅くも四月初旬迄には是非式を擧げたいと、然う云つて居つたがな、君は何うする考へかの」

「色々御心配を懸けて相済みません。實は先日一寸向へも話して置きましたが、

近い内又長崎の方へ出張するかも知れませんが……。」

「例の工事監督かの……。」

「然うです、で、成るべく歸つてからに爲たいと思つて居るので……。」

「と、何日頃になるのかな」

「左様、五月……末になりませう」

「然うか。」と、大佐は一寸俯いて考へたが、

「併し都合とあらば仕方ない、それ迄延期する外はあるまいな」

「え、その事は彼方も確か承知して居りますので……。」

「然うか、猶此方からも何れ能く話して置かう」

「何うか宜しく願ひます」

話しつゝ何時か二人は食事を終へた

「然し君は何だらうな、今更異存が出来たのぢやアあるまいな」

「決して其様ことは……。」高村は慌てた調子で打消しながら、

「誰か其様ことでもお耳へ入れましたか」

「はつゝはつ。」と、高村の心配らしい顔色を見て、大佐は失笑した。

「何も有らんぢやない！唯念の爲め聞いて見たのだ。君だつて恐らく那女なら

不満足も無からう……。」

「翔つては困りますな。」と高村は少し頬を赧める。

「何も翔りませんが、全く不足はあるまい。俺も大に世話甲斐のある意りだ」

「……。」

「だが、満足なのは君より寧ろ令嬢の方が餘計だらう！是迄候補者も随分あつ

たのだが、一人としてお氣に召さなかつたのだ、處が……はつゝはつ君に

限つて諾と云つたのだからの」

「然う冗談を有仰つては可けません」

高村は苦笑する。

「何も冗談ぢやない……。」と、大佐が猶辨じやうとした時、給仕が走つて來



て、何やら書付けたものを大佐の前へ差出す。無言にそれを讀下して、  
「宜しツ」と、給仕を返し、徐ら立つて椅子を離れる。  
高村も共に立つ。  
人影は最う食堂に見えなかつた。何室かで電話の鈴が鳴る。

百四

(十七)

名和家の客間には、今來客があると見えて、煌々と障子に映る電燈の火影に、  
男女の姿が様々に動揺いて、主夫婦も其中に混つて居るらしく、睦まじげな話  
聲、笑聲の絶え間なく室を洩れて、戸外は湿々降り物の寂しい宵であるが、此  
家は例ならず賑はつて居る。  
銚子を替へにと客間を出た女中のお仲は、仿ない琵琶音を響かせながら庖厨へ入  
つて、徳利の酒をゴボ／＼、銚子に移しつゝ、働いてる飯焚婢を見返り、  
「何うでせうお春どん、お客さまの吞助にも呆れるのね、これでもう八本目な

のよ」

「まあ厭なお仲さんね、自分が御馳走するのでもあるまいし其様お銚子の勘定  
なんかして」

「だつて何時來ても長いのだから、今夜は何の位飲むか試めさうと思つて……  
……………」

「ちやお客と云ふのは例の方？」

「あ、然う、水田と云ふ、ほら、お嬢様のさ……………」

「然う？ちや又那の相談ね」

「もう愈よ極つたらしいよ」

「あら然う、何日頃なの？」と、お春は流元で洗物をしてゐた手を止めて、お  
仲の顔を眺めながら、何やら恍惚となつたが、

「一寸お仲さん、お前さんお嬢様の旦那様を知つて居て？」

「あゝ二三度見たわ。」

「然う、其麼人？」

「甚麼人ツて、そりや何うせお嬢様のだもの、分つて居るわね」

「分つて居るツて？でも妾には分らないわ」

「お春どんたら本當に話せないのね」

「ぢや好男子？何時も能く来る郵船會社の、あのハイカラの何とか云ふ……。」

「石田さん？」

「あ、然う、那の石田さんのやうな方」

「何うして那麼石田さんのやうな弱け男なんか、足許へも追付きやあしない」

「まあ口の悪いこと、石田さんは何も其様に弱けては見えないわ」

「おほ、お春どんお氣に召したの……。」と、お仲は冷かすやうにお春を見

「其様御執心なら妾取持つて上げやうか」

「あら厭な……私、何も那様こと考へてや爲ないわ」

「假んば考へても駄目よ」

「そりや分つてるわ、身分が異うんだもの」

「身分が異はないでも猶且駄目よ」

「何故？」

「何故ツて、知れてるはね、お嬢さんと云ふ美くしい的があるんだもの、お春

どんや私のやうなものには涕も掛けて呉れやアしない」

「然う？石田さんも猶且お嬢様に？然う、私些少も知らなかつた」

「知つて落膽したらう」

「厭なお仲さんだよ、私何も石田さんのことなんか思つて居やしない」

「思はれたら大變だとさ」

「何でも宜いわ。けれどもお嬢さんの事を石田さんが聞いたら嘸、落膽するだらうね」

「おほ、矢張り思つて居る人のこと丈けあつて、同情が深いのね。それは

落膽する人は石田さんばかりぢやない、家へ来る若い男の人は、悉皆お嬢様を張りに来るんだもの………口惜しいよ」

「好い縹緞に生れたものは徳ね」

「羨ましけりや生れ變つてお出でなさいだ？、本當に此儘ぢやお互に誰も相手にして呉れやアしない」

「悉皆備つて来るのだから仕方が無いわね」

「まア可い加減の處で我慢するのさ。何も石田さんで無くたつて宜いやね」

「お仲さん、もう石田さんのことはお止しよ」

「だつてお前さん、愈よお嬢様の方が駄目と分れば、石田さんにだつて又話の付がない事もないよ」

「お止しよ最う」

「待てば甘露の日和つて言ふぢやないか、何う先方で考へてるか分りやアしない、現にお嬢様だつて決つたお婿さんが有りながら………」

無間斷慕なしに喋つて来たお仲は、茲に至つてピッタリ口を閉ぢる。

「お嬢様何うかして？」

「……………」

お仲はつひ口を滑らして困つたと云ふやうな顔。

「お嬢さんにも何か有るの？」

「何でも無いことさ。」と、お仲は抛げるやうに云つて其儘他方を向く。

「然う隠さないでも可いやね、お互の間ぢやないか、他に洩らしやしまいし、お聞せな。」

お仲は當惑の眉を翳めて、稍暫らく考へて居たが、

「ぢや話すよ、話すことは話すがね、他に知れると大變だからね。」と、四邊に氣を兼ねて聲を低める。

「大丈夫だよ。」と、お春が乗氣。

「實はね、這麼ことがあるのだがね……………」

近頃新聞記者と名乗る浦波と云ふ男が繁々出入する事、お嬢様が非常に其人を歓迎する事、何日も自分の居間へ呼入れては長い間何やら面白さうに話して居る事、併し二人の間に怪しい関係は無いらしい事など、多少自分の想像をも附加へてお春に語つた。

「まあ那樣ことがあるの。」と、お春は豫期以上に驚いたらしかつた。

「何しろ御婚禮も近いのだらうに、那麽無遠慮なことをして、若しお婿さんの方へでも、聞えたら何うするのだらうと、私や他人事だけど本當に心配になるわ。」

「ただ、お嬢様のことだから其方が破談になつた處で、お嫁の口は幾らも有らうさ。」

「そりや然うでも、女は受身つて、一旦懲うと決つたことが破談ると、何うも後が宜くないのでね、實は私だつて……。」

「おや、お仲さんも其方の口。」

「其方の口ツて、何？」

「破談れた口？」

「まあ酷いことを……。」お仲は憎らしさうにお春を見て、「何うせ私なんか賣れ残りの御多福だからね、そりやお春どんとは比べものにはなりませんよ、おほ、石田さんのことを兎や角思つてる女は異つたもんさ」

卑下すむやうに笑つて、其儘衝と七輪の傍へ寄ると、鐵瓶から銚子を取り出して、其底を布巾で拭ふ、途端に客間でお仲を呼ぶ聲がする。

「お春どん、今に散々油を取つて上げるから見てお居でよ」  
云捨てるなり急遽と行く。

(十八)

主人夫婦が心を籠めての養應振に、水田大佐は早や十二分に酔うたらしく、盃を持つ手も危しく震えるが、有繋に軍人、肘を張り肩を貸つて、絹蒲團の上

に大胡坐を組んだ姿は威風がある。殿めしい顔に他愛も無い笑を浮べて、疎らな、口髭を捻りながら、主夫婦を前に置いて、大佐は先之から獨りしての喋り續

け、  
「のう名和君、君と僕との交際も最う彼是二十年になるの、歳月夢の如し、全くだ、始めて君と附會い始めた時分には、お互に一人法師、下宿の隅に轉がつて、腐りかへつた飯を喰はされて嬉しがつて居たのだからな。それがお互に何日の間にか髯武者の親父になつてしまつて、女房も持てば子も生きる、それで喧嘩一ツしたではなし不相變平氣の平左で憊うして交際して居るなどは、考へて見ると實に不思議なことさ、これが全く佛説で云ふ因縁と云ふものだらうの。お互にもう百年と生きられる程では無し、まあ今後とも愉快に交際を續けたいものだが」

「全くです、今度絹子を御世話して戴くやうになつたのも、全く其奇縁でせう、私も男の子ッてはまだ全然子供だし、只もう絹子ばかりが楽しみでな、それが

お蔭で何うやら身が決るやうになつて私も家内も非常に安心しました。絹子のことは何日もお話しする通り、彼方からも此方からも随分申込者はあつたのだが、私や家内の氣に入つた者は何うも彼子の氣に入らんやうで、實は大に手古摺つて居つた處へ、圖らず君から高村君はと云ふやうな御話があつたで、前々からの例もあるし、内々は何うかと案じながら、それとなく彼子の意向を訊いて見ると、彼子も何うやら首を堅に振るらしい様で、私等夫婦は固より異存あらう筈はないから、まあ調子能く相談が運んで、憊うした事になつたのは實に幸ひで貴君も嬉しいだらうが我等は猶のこと嬉しい。此上は何うか一日も早く二人を一緒にさせて安心したいものだが……。」

「や、私も其希望でな、先刻も云ふ通り色々高村に通つて見たのだが、何しろ官命で出張すると云ふのだから、然う没義道なことも云へず、ま、永い間ではなし、高村の意見に任かすが可からうと思つてな」  
「五月と云へばあと二月ですからな、待てば永いやうなもの、經つて見ると案

外早いものだから、まあ其間に悠り仕度でも爲せて置きませう」

「それが宜い。」と、大佐は卓子に置いた盃を執つて呷と飲む。

主は更に酌を爲ながら、

「何しろ、那して甘やかしに育てたものですから、先方へ嫁つて役に立つか什麼ですか。」

「何有に、其様ことは決して心配するに當らん、兩親かあると云つても國許に別居して居るのだし、少しも難かしいことはない。只高村の氣嫌さへ取つて居りやそれで済むのだからの」

「それが中々我儘と來て居るから」

「我儘でも何でも亭主の氣嫌が取れんことも無いのだから、名和君、私は何時も若い娘に然う云つて聞かしたるのぢや、女が嫁にゆく資格には學問も要らん、遊藝も要らん、只亭主の氣嫌さへ取ればそれで結構だと云つとるのぢや何うですな？ 究り、女房の役目は一家を整理するのでも無い、子を生んで育て

るのでも無い只亭主の氣嫌を取るのが唯一の役目ぢや、その役目さへ甘く爲完

せるやうな女なら、借老同穴、大丈夫添遂げられる？、それを世間の没分曉漢

がやれ賢母良妻の、やれ割烹の料理のと大業にして、これが妻の役目だなど

、飛んだ出鱈目を教へるから、何にも知らぬ若い娘達はそれを信じ切つて

亭主を持つてからが、猶且それを後世大事に守つて居る、肝心の亭主の氣嫌

を取ることなど、全然考へやせん、否、考へないどころか、却つて屁理屈を楯

にして亭主に喰つてかゝるものが随分有るやうだ！はつ！はつ！

「全くですな。」酒に飽いたらしい主は喫みさしの葉巻に火を點して、

「我々如きものが嘴を入れる権利も無いが、近頃の女子教育は左右小さな末枝

に走つて、其根本は全て忘れて居るやうに見えますな」

「然うですとも！」大佐は猶盃を放さずに居る。

「何日ぞや高村が遊びに來た折も、二人して大に論じたがの、高村は有弊にま

だ年齢が若いで、何うも空論に走せたがるのぢや、それから俺言うた、大体女

といふものは何も自分が深く成りたいとは思はぬもので、男に働かして置いて、其威光を自分に着やうとして居る、それで可い。生意氣に自分の力で世の中に立たうと思ふなどは大間違で、其目的を果せにたした處、男に比べれば小さなものだ、其様充らんことに骨を折るよりか、女は女並に其天職を守つて、亭主を大切にして、其亭主の働きで自分も幸福を願つ方が何程可いか分りはせん、だから私は何處迄も女は男の氣嫌を取つて行くのが職分だと信じて居る。家政も要らぬ。只亭主の氣嫌を取ることが妻としての第一義だ、これは事實上決して助かぬことで、随分世間には賢婦人と云はれる女で、始終家の中で睥睨合をしてゐたり、家政向きのことが上手で居ながら、何うしても亭主に嫌はれて居る實例はいくらもある……。」

「然うすると貴君の議論は、結局女は充らん者、採るに足らぬ者と云ふ譯になるのですか」

「否、充らんものは女はかりぢや無い、現に我々も然うだ、慥うして海軍大佐

だとか、功四級だとか云つて、自分の功名のやうに思つてゐるもの、悉皆部下の兵卒や、軍艦や、大砲の力に依つて出来たもので、能く／＼考へて見ると、本統に自分獨りの力で得たものぢや無い、だからの、功一級の何の某と言はれても、恐らく自から省みたら、私と同様の感ありだらうと思ふ。究り他物の力を借りて自分を飾る點は、女だつて我々だつて同じぢや。だから私は女を充らんの取るに足らんのとは言はん……、却つて男の眞似の出来ない、羨ましいものだと思つとるくらゐで……。」

「や、貴君の御説は實に面白い、一々感服しました、亭主の氣嫌氣襍を取るなんて、一寸考へると如何にも充らぬやうだが、成程、貴君のやうに解釋して見ると、充らぬ處ではない」

主は頻に感歎の聲を上げたが、事理に疎い其妻は、大佐の言葉も深くは耳に入らぬらしく、愛想よく酒席を執成しつゝ、只管に大佐の盃の乾ぬやうにと、そればしに氣を配つた」

大佐は猶酒に親んだが、遂には眠氣さしたと見えて、朱を注いだやうな口を開くと、誰憚らぬ大欠び一ツ、議論も茲に盡きた姿だ。夜は更けて、雨は未だ歇まぬらしい。

(十九)

三月の中旬、高村は愈々長崎へ出發することになつた。豫て内命もあつたので、仕度は萬端整なうて居るから、愈々明日午后十時發の急行で新橋を立つことに決めた。梅は疾うに盛を過ぎ、櫻は未だ早いけれど京大阪の名所には多少の春を探り得やう瀬戸内海の春霞も風情があらう、東風車窓を吹いて、眺望汽車の馳るに任かすこと三百里、思へば心地好い春の旅。高村は黄昏の窓に倚つて、歸宿の途中で求めて來た旅行案内の其處此處の頁を繰廣げながら、軍服を着換へるのも忘れて、旅行先の光景を空想に描いて居たが、出し抜けに後の襖が開いて、宿

の主婦が首を出した。

「高村さん、貴君まの燈火も點けないで、何うなすつたの」

主婦は床の間の置洋燈を取つて、火を點けながら言ふ。

「那の名和さんのお嬢様が被入しつてよ、お通し申して宜いでせうね」

「あ、然うでしたか」

旅行案内を机に置いて、クルリと向きを換へると、主婦が出して呉れた火鉢を前に、窮屈さうに膝を直す。

「何うもお世話でした」

間も無く絹子が入つて來た、手に持った肩掛を竊と襖の傍へ置いて、火鉢の手前へ來て、ベタリと坐る。

「さあ、すつとお寄りなさい」

高村は一寸火鉢の前にある坐蒲團の位置を直しながら、

「今歸つたばかりなので、道塵風姿をして居ます」



「大發運かつたのですね、何處へかお廻りでしたの」

「え、少し買物があつて廻り道をしたものですから……。」

「然う！」と、絹子は態とならぬ美しくしい笑顔に高村を見て、

「もうお仕度の方は全然お済になりましたか？」

「はい漸と出来ました。」

云ひながら高村は床の間に積み並べた行李や鞆の方へ眼を向ける。

「もう御立ちになるばかりですのね。」絹子も同じ方を見遣つて、「愈よ明日の晩になりましたわね。」と、寂しさうな顔をする。

「え、又一二ヶ月はお目に懸れんです。併し此度の出張は比較的日子が短いのですから、譯は無いです、それに時候は恰ど佳し……。」

「春の旅行は願つても行き度い位ですわね」

「それが見物丈けなら宜いですが、煩い用務を帯びて行くのですから、餘り面白くない程でも有りませんよ」

「でもお役所にお在でよりは……。」と、絹子が云ひ懸けた時、主婦が茶と菓子を持つて来た。

「何うぞお介ひなく、主婦の注いで呉れた茶を絹子は一口喫むと下に置く。

「さアお敷き下さい。」愛想の好い主婦は傍の座蒲團を絹子に薦めて、静に室を出る。と、二人は又話し出す。

「御用で無いと、妾もお伴致したい位で御座いますのね」

「然うですな。」視線を壁に注いで、何か考へてるらしく、聽て顔を上げると絹子を見て、何か云ひ出さうとして、又躊躇ふ如く俯いて了ふ。

「先日水田さんが被入しやいました……。」意味有りげに高村の顔を眺めて、其儘口を噤む。

「然うださうですな、那のことも歸つてから決めることに、大佐に願つて置いたですが、無論、貴女もお聞きで爲たらうな」

「はあ？」

互の視線がバツタリ合ふと、何といふ事なしに下を向く。

「歸つたら早速決めることに爲ませう、私とても然う何日迄も不確定にして置くのを望まんですから……。」

衣兜から巻蓑を取出して、火を點けやうとしたが、弗ど火鉢に翳して居る細い綱かな絹子の手に氣が付くと、俯きながらも顯然と美くしい絹子の姿が眼に浮んで、傍近く其人と差向ひながら、遠い昔の戀人を思出したやうに、懐かしさ慕はしさが胸に湧いて、高村は何時にない心の動搖を感じた。

生來美しい絹子は、何不足ない家庭に養育まれて愈よ美しく、一たび相見た、青年は孰れも心を動かすだらうと思ふた程の絹子が、今自分の前に坐つて居る！、應ては自分の妻となるのである！美くしい絹子を妻とするに就いて、自分は今迄今日のやうな情の起つたことは無い！

單調な學校生活を終つて、職を海軍に奉ずるに至つた今日迄、自分は只智識慾の爲めに其全精神を傾けて居た、艦型の研究に全身を委ねて、それを希望とも

生命とも思ひ、青年時代に有がちな性慾の亢進に就いても、他の學友の如く、それ程の注意、それ程の興味を感じなかつた、併しそれは決して無かつたのではない、學術研究の趣味が自分の心を俘にしてつて、其様方面に費すべき時間も餘裕も與へなかつたのだ。妻といふ者に就いても同様で、自分は内助を得やうとか、慰藉を得やうとか、其様考は殆ど無く、只舊來の習慣に任せて、半無意識に其必要を認めたまに過ぎぬ。それが神戸で秀香に出會つた時から、自分の心が非常に動搖き始めた。夫迄は只學術上の研鑽に依つて世を驚かさう、人を服させやうと云ふやうな、然う云ふ方面ばかり考へて居た。

それが一度社會へ出ると共に、儘ならぬこと、不愉快なることが、潮の如く自分の身邊に押寄せて來て、脱れやうとしても出來ず、捨てやうとしても出來ず、自分は憤惱した、絶望した、しかもその憤惱、その絶望は、不思議にも秀香に依つて慰藉られた。感情の奴隸無智の動物と侮蔑して居た其女性から、自分は不思議にも救ひを享けた、自分は一時に秀香が氣に入つてしまつた。で、無上

に飲んで遊んで了つた。併し自分はその慰藉されたのを、秀香の商賣が商賣ゆゑと思つて居た、現に絹子と結婚を約しながら、同じ慰藉を絹子から得やうとは期待しなかつた。今迄三回も會つて居るが、然ういふ心は更に起らなかつた。それが今宵に限つて絹子のこと妙に自分の心を惹く。二ヶ月に近き旅行、公用以外に些少の趣味も感興も持たなかつた自分、例へば卒業論文に筆を附けた時のやうに、今度の旅行が何やら重大な意味あるもの、やうに感ぜられる。で、絹子も恐らく自分と同様に、此旅行の終極を熱心に待つて居るのではあるまいかと思ふと、高村の胸には云ひ知れぬ愉快が波の如く湧き返る。

と、高村は我に返つた。  
絹子とは見廻せば、話の途切れた所在なさであらう、机の上の旅行案内を手にとり取つて、其名所案内記の邊を讀んで居る。斜に洋燈の光を浴びて、端然と坐つた其姿、容貌といひ、品位といひ、到底賤しい秀香などの及ぶ所ではない、と然う思ひながら高村は我ともなく恍惚と見惚れて了つた。

高村が東京を出發してから、恰ど一週間も経つた頃である、絹子は久振で舊友芳子からの手紙に接した、先方の所は伊豆熱海潮風館にてとしてあつた。四國の果に蟄居して居た芳子が、何時の間にも何うして熱海などへ來たのだらうと、絹子は訝りながら急いで其封を切つて見ると、何時に變らぬ水莖の跡、優さしくも細々と書き流した巻紙は、帯程、長いのを、絹子は息も繼がず讀んで了つたので。

芳子の手紙には、所夫が此度静岡岡縣へ轉勤を命ぜられて自分も亦隨丁て静岡へ遣つて來たが、其前後から風邪が原因で氣管支炎に罹つて居た、で、恰ど宜い機會であるから、所夫に請うて保養がてら熱海へ來てゐる、其内是非一遍上京して久々で會ひたいけれど、二三週間の内には逆も行かれぬ、併し何了かして一日も早く絹子に遭ひたい、遭へば話しは山ほどある、中々一晩や二晩では話

し切れぬ程澤山ある、何丁か都合して遊びがてら来て貰ふ譯には行くまいか、  
這麼自分勝手云つては、濟まぬけれど今は孤獨の寂寥さに堪へかねて居る。  
若しも可哀と思ふならば、友達甲斐に是非来て呉れ、訪ねて呉れとの趣意が事  
細かに記されてある。

「まあ些とも知らなかつたわ」と、絹子は讀み完へた其手紙を巻返して、再び  
目を通しながら、包み取えぬ喜ばしさを面に浮べる。學校を出た時に未永く變る  
まい、決して文通を怠るまいと、互に堅く約束して別れた友達は二十何名かあ  
るが、其多くは半年一年の内にパツタリ、消息を絶つて、永く續いたのも二年  
とは保たなかつた、其中に只一人、昔に變らぬ文の遣り取りをして居るのは芳  
子ばかりである、お互に氣が合つて居たとは云へ、他の友達で最度親密なもの  
あつた、それが何うしたことか芳子だけ残つたのは、能々盡きせぬ縁であらう、  
其芳子が今熱海へ来て居ると云ふ、しかも病氣保養の爲めであると云ふ、行か  
ずばなるまい、見舞はずばならぬであらう、熱海なら遠くもない汽車もあれば

人車鐵道もある、一日かゝれば行かれる處だ、是非行かう、義理にも行かねば  
ならぬ……。

思ひ立つては矢も楯も耐らぬ絹子の氣象、直ぐそれと兩親に請うて、供には女  
中のお仲を連れて行くことになつた、芳子には翌日行くと電報で前觸をして、  
其夜は遅く旅立の用意を爲し、臥戸には入りながら久々で舊友に會へる嬉しさ  
に、能くも眠らず夜を明かした、翌朝主従二輛の俵を聯ねて、新橋停車場へと  
駆付けたのは、街頭の朝霧猶露れぬ六時頃、停車場に着くと、今恰ど六時發大  
垣行の列車が發車したばかりの處である。次の國府津行六時三十五分には、未  
だ一寸相間がある、絹子は切符や手荷物のことを、お仲と車夫に吩咐けて置い  
て、自分は直ぐと待合室へ入つて行く氣が急いた爲めでもあらう、美しく化粧  
粧した顔は、ほんのり櫻色を帯びて、開髪に結つた髪は艶、蒔繪の三枚櫛のケ  
バ／＼しからぬも人品好く、葉美な縞お召の薄綿入に、金糸入の厚板の帯を締  
めて、羽織は小豆色の紋付、服紗包にオリブ色、蝙蝠傘を小脇に抱へて、今し

も待合室に入つた絹子の、目も覚めるばかりな其艶麗さ、乗後れたらしく待合室の卓子を圍んで、新聞を讀んで居た四五人の乗客は、何れも云合したやうに顔を上げて、一樣に其視線を絹子の上に移す。

絹子は室の一番奥にある腰掛へ腰を下ろした、然うして何氣なく卓子の方を見ると、例の四五人は不相變自分の方を眺めて、何か若りと囁き合つて居る。失敬など、心の裡では怒りながらも、絹子は素知らぬ顔で、傍へ置いた服紗包から旅行案内を取出し、國府津着の時刻など調べて居たが、其内お仲も用を済まして待合室へ入つて来た、五分、十分と時の經つに連れ、乗客はどしどし詰めて掛けて何時か腰掛に空きも無い程の雑沓となる。下駄の響、靴の音、騒ぎ立つ乗客は其處此處と思ひひの、一團を成して、話聲、笑聲、耳を聳するばかりの喧ましさも、應て發車を報する一鈴の響きと共に、雪崩の如く改札口に押寄せ、長きプラットフォームを、小股走りの忙がはしく我一にと汽車の扉に手を掛ける、絹子も群集の中を押されながらに漸と乗つた。

時刻か時刻なので二等室も案内人込みであつたが、絹子とお仲は都合よく車窓の直ぐ傍に向つて坐る。

號笛が響くと共に汽車は徐ろに動き出す。

芝浦、高輪、と變りゆく町々は猶露の裡に包つまれて品川沖の朝景色は眺望を遮られたが、麥畑の積く大森邊から空は次第に晴れて、應て六郷の鐵橋を渡る頃は、長閑な春の日影が窓に動いて、恍惚としたやうな空模様、野にも畑にも七分まで春が見える。

川崎、鶴見、神奈川の三驛を過ぎて、汽車は今横濱に着いた。乗客の大部は此處に降りて、室内は大分寛げるやうになつた、此處から國府津迄は未だ一時間も懸る、それから電車で小田原へ行つて、更に人車鐵道に乗換へて熱海迄行くのであるから、向へ着く頃は、多分日暮であらう。芳子は定めし自分を待ち詫びて居やう、何年と云ふもの芳子には會はぬ、既に人の妻となつた芳子は、定めし自分の想像する以上に變つて居やう、昔の學校時代の快活な面影は全り失

せて、端然として奥様氣質になつたであらう、それに引替へ、自分は昔の儘である、何處迄も學生時代の癖が取れて居ないやうに思はれる。と、芳子と自分とは、是迄手紙でこそ絶えず往復はして居たもの、面のあたり顔を合せた時、猶同じやうに打融けて話し合ふことが出来やうか、自分は芳子の手紙を見て、只最う逢ひたくて、那樣ことを考へる餘裕も無かつた、若しも折角慙うして訪ながら、豫期の興趣を味ふことが出来なかつたら、自分の折角の志も無になるばかりでなく、併せて手紙の上の交際までが無意味のものとなりはせぬか、自分は何故も少し考へなかつたらう、芳子の手紙を見て、直ぐ様逢はうとしたのは、稍輕卒であつたかも知れぬ……。

然う考へた時、絹子は今迄樂しみにして居た芳子との對面が、何となく興味無いやうに思はれたで、奥様氣取で濟まして居る多くの舊友のことなど思ひ浮めながら、同じ類型の中に芳子の面影を想像して見た。

芳子が嫁つてから以來、絹子はまだ一度も顔を合はしたとは無い、那か慙うか

と思つて見る、胸に描くところ、心に感ずるところ、それは皆學生時代の芳子である、他の舊友に見るやうなツンと濟した姿は何うしても浮かんで來ない、逢つたら今でも昔の如く自分に抱付くやうに思はれる、話をしたら一晩寝ずに話すであらうと考へられる、假令人の妻となつたからと言つて、芳子に限つて其態度の變るやうなとは斷じて無い、現に自分を招いた那の手紙を讀んでも其様子が壓々胸に映つる、恐らく芳子は首を長くして今自分の行くのを待ち詫びて居るであらう、愈々熱海へ着いて自分の姿が其前に顯はれたら、芳子はまあ甚麽に喜ぶだらう、然う考へると一刻も早く芳子に逢ひたくなつて、汽車の進行が焦躁しくなり、絹子は胸を翻られるやうな氣持がした。

汽車はまだ程ヶ谷の隧道を過ぎたばかりである。

(二十一)

銀座一丁目の大通、毎朝新聞社の階上にある應接室の丸卓子に倚りかゝつて、

退屈さうに巻蓑を焼らしなから、先刻から人待顔なる年若の學生は、例の茅野。時は午后三時を過ぎたらう、暖かい春の日は、其優さしい光を硝子窓に投げて、只さへ穢くろしい室は、心地の悪い程汚く見えて、空氣も汚れて居る、らしいので、茅野は窓際近く進み寄り、今しも窓枠の止金具に手を懸けた時靴音高く廊下に響かせて、外から勢よく扉を排けて入つて來たのは文藝記者の浦波である。

茅野は脱しかけた金具を其儘にして慌て、卓子の傍へ戻り、浦波を見て軽く會釈して、差向の椅子に腰を下す。

「貴君が茅野さんと云ふ方ですか。」と、浦波は疑り深い眼色に茅野を見て、

「私は浦波ですが、御用と云ふのは……………」

「は。」茅野は懐中から一封の書状を取り出して、

「實は此紹介状の中にも書いてある筈ですが、僕の一身上に就いて少し御相談願ひたいことがあつて參つたので。」

「貴君の一身上？」と、だけ言つて、手紙を見ると、紹介者は大學生の吉野二郎である。

書状を読む。

「吉野君の手紙に依ると、何か貴君が御自分の一身上に就いて新聞に書いて欲しいと云ふやうに見えますが……………」

見て了つた其書状を巻いて、封筒に納めながら徐ろに茅野の方を向く。

「然うです、是非一つ御盡力を願はねばならんことなので……………」と茅野は乗りかゝるやうに卓子へ肘を突いて。

「獨僕の一身に關するばかりではなく、延ては社會の風紀にも關係することですから……………」

「は、あ！で其事件と云ふのは……………」

「それは……………」と、一寸云ひ淀んだが、

「御承知でせうが、近頃少し名が聞え出した筑前琵琶師の青柳秀香と云ふのを

……女です……」

「青柳秀香？知つてます。」

浦波は何気なく茅野の顔を見たが、其時ゆくりなくも胸に浮んだのは、十番の縁日に見た秀香の一條である、もう一月の餘にもなつて、忘れるともなく忘れて居たが、秀香の名を聞くと共に、其夜のこととが顯然と眼の前に展かれた、夜目に確かとは分らなかつたが、其時秀香と伴立つて居た男は、何うやら此茅野らしく思はれる、否、其姿、其聲、何うも此男に相違無い。其折の狼藉の状は自分の能く認めて居る所である、が、兎に角彼の語る所を聞かう、と浦波は素知らぬ状を装つて、

「青柳秀香が何うしたと云ふのですか。」

「實は其女のことを少し新聞紙上へ曝露して戴き度いと思ひますで。」

「は、あ、何かあるのですか……」  
「は、あ、何かあるのですか……」  
有るです、然し彼のことを露曝すると云つた處で、僕は何も私怨があると云ふ

のでは無いですが、事實は素と僕の身に関聯して起つたのですが、僕は只其藝人として甚だ不謹慎である、怠慢であると云ふ點を攻撃して頂けば、それで宜しいです、委しい事は今申しますが、それに猶秀香女史と或る紳士との面白い關係もあるのです、三面の記事としては好個の材料だろうと思ひますので……」

浦波は去り氣なく待遇ひながら、

「左に右先づ其事實を承ることに致しませう。」

茅野は七面天の縁日に、秀香を挑まんとして美事跳ね飛ばされた怨み耐へ難い折柄、秀香に情夫があると云ふ話を土井と須田に聞かされたので、嫉妬、憤懣、ムラ／＼と胸に燃えて、其後秀香の跡を跟けること十數日、遂に其情夫なるものを突留め得た、併し相手は高村と云ふ案に相違の立派な紳士、中々秀香如きもの、玩弄物になるべき代物では無い、併し兎に角人目を忍びつゝ、折々逢引して居るのは事實である、關係の有る無いは確と分らぬが、以上の事實は二人の



關係を推斷すべき十二分の材料である、可し！、これで秀香を苦しめて遣らう  
茅野は然う思つて更に其陥れる手段に就いて考へた末、友人の吉野が浦波を知  
つて居ると云ふことを思ひ出し、それを傳に浦波に面會して、新聞の利器を道  
具に秀香を苦しめやうと、懸つたので。

「今申したやうな譯で、僕は筑前琵琶が好きなき處へ、丁度秀香女史が隣に居る  
ので習ひに行つたです。處が那の女は眞面目な青年を随落させる悪魔なので秀  
香女史と云へば、近頃琵琶の社會では、大分名が賣れて來た女です、其女が假  
初にも賣淫をするなんて、實に怪しからぬ話ではありませんか。」

「賣淫。」と浦波も有繁に目を瞪つて。

高村とか云ふ紳士にも賣淫したと、然う有仰やるのですね。」

「然うです。」

「何か證據でもありませんか。」

「否、證據と云つて別に之れと云ふものも無いですが、兎に角賣淫に違ひ無い

です。」

「何うしてですか。」

「それは考へる迄も無いでせう。相手は海軍の士官ではありませんか、軍人と  
もあらう者が、琵琶彈きの女と逢引する……何うしても賣淫と認むる外は無  
いと思ひますが……。」

一寸待つて下さい、その秀香女史に關係ある高村と云ふ人は、確かに海軍の人  
なのですな。」

「然うです、本村町に下宿して居る其處の宅までも突留めたです……。」

「本當ですか、今迄冷静であつた浦波は怪しい光を眼の中に浮めて、

「確かに海軍士官の高村と云ふ男ですな。」と、念を押すやうに聞く。

「然うです、確かに然うです。」

「實に意外だなア。」と、浦波は口の裡に叫んだ。彼は絹子の許嫁でないか、未  
來の所夫ではないか、その高村が——假令如何なる事情あるにもせよ、琵琶

彈きの女などと逢引するとは、實に意外な事だ、自己の品位に關し名譽に關するばかりでなく、一步を進むれば、更に其未來の妻たる絹子の名譽にも關するではないか。自分は高村と一面の識も無い、併し絹子は自分の友人である、全身を捧げて愛慕する友人である。其人の不名譽たり耻辱たることが自分の耳に入つた以上、これは何うしても聞捨てにならぬ、直ぐにも絹子の前に此一部始終を話して了はねばならぬ、……が、絹子はそれを聞いて、何う云ふ感じを起すだらう、或はそれが原因となつて、折角纏まつた縁談の破れるやうなことは無からうか、勝氣の絹子のよもや黙つて居ることは無からう、破れるに極つてゐる。破るに決つて居る、若しも破れたら……。

浦波は咄嗟の間に慙う考へた時、怖ろしいやうな、嬉しいやうな思が胸に湧いた。

俯いた儘、何の應答もない浦波の心を付り兼ねた茅野は、何うでせう、書いて戴げませうか」と、不安らしく聞いた。

「あゝ然うでしたな。」と、我に返つた浦波は、今更のやうに茅野の顔を眺めたが、今度は十番の夜のことが眼の前にちらついて、茅野の姿が不都合な男、不埒な男とより外には映らない、今の話も無論捏造であらうとも、思ひながらそれらも亦疑ひ。兎に角吉野の口添へもあるからと、

「何れ能く三面の主任とも協議しまして……それに假令揭すとしても其前私の方で一應調査すべき必要もありますから……。」

「何うぞ是非御盡力を願ひたいものです。」

「決定次第何れ御通知することに致しませう……ちや多忙ですからこれで失禮……。」

浦波は最う椅子を離れた、

「何うも御邪魔しました。」

悄然として室を出てゆく茅野は失望したらしい顔色、それを見送つた浦波の眼には侮蔑の色が浮いて見えた。

茅野に別れると浦波は直ぐ編輯室に戻つた。机の上にはまだ手も着けぬらしい寄贈の新刊書が六七冊積んでおつて、其傍には披いたまゝの文藝雑誌が二三冊取散らしてある、今恰ど一版の締切が終つた所なので、係りの記者は其處此處に一團となつて、茶を喫むやら、煙草を喫かすやら、思ひくの熱を吹いて居る。

浦波は書き懸けの文藝時評を又書出したが、秀香女史の一條が氣に懸つて、何うも面白い思想が浮ばぬ。

茅野が心事の陋劣さも推量されたが、併し高村と秀香との關係に至つては、中々聞捨てにならぬ事だ、自分の敬愛する絹子の所夫たるべき高村の不品行を耳にしては、什麼しても黙つて居る譯に行かぬ、若しも茅野の云ふ所に偽りが無いならば……否、恐らく事實であらうと思はれる、自分は絹子の友人として、

何うしても事實を報告し、其戒心を促す必要がある。然し自分の一言が二人の間に如何なる結果を來すであらうと考へると、寧ろ此儘口を噤んで居る方が宜いかとも思はれる、自分さへ黙つて居たら、絹子は或は知らずに済まして了ふかも知れぬそれを殊更友達面して絹子に告げるのは大に考ふべきことではあるまいか……。

けれど、自分は絹子に對して、何うしても此儘黙つて居ることは出来ぬ、見す／＼絹子の不名譽になるのを知つて居ながら、知らぬ顔をするには忍びぬ、自分は何も高村に對して、殊更に其利益を擁護すべき必要は無いのだ二人の關係が破れやうと繋がらうと、……只自分は友人としての地位より、事實を絹子に語るに過ぎないのだ、それが爲めに絹子が甚麽感を抱かうとも、をれば絹子の自由だ、自分が左や右云ふべき必要は無い……。

併し絹子はそれと聞いて喜ぶだらうか、悲しむだらうか、教へて遣つた自分の好意は無論感謝するに違ひないが、高村との關係——それを絹子は何うする

だらう、快活した氣質とは云へ、女は猶且女だから、思切つた事は出来ないだらう、約束を破棄する事は出来ないだらう、然うすると、自分が絹子に對して高村の内秘を發くのは、假令友人としての義務であるにせよ、何うも絹子の喜悅を買へさうも無く思はれる、否、寧ろ自分の友誼を盡くす所以で無いらしく思はれる……………。

浦波は此事を寧ろ自分の胸に疊んで、絹子には一切云ふまいかとも思つて見たが、若しも絹子の心が自分の今考へた處と反對であつて、これを宜い機會にして高村との約束を破棄しやうと云ふやうな希望が、萬一其胸の底にあつたとしたら……………。此事實を秘密の裡に非らうとする自分の好意は、却つて絹子の不満足を助長するやうになる、何うしたものだらう、絹子に對して……………。思ひ、惑うて、心を決しかねた浦波は、不圖氣が付くと、奮くとなく、原稿紙に徒ら書をした中に、絹子、約束、破棄、未來、戀なども記してあるので、彼は人知れぬ耻かしさに、其面を蔽くした。

自分は何うして恁う絹子のことばかり氣になるのだらう友人としての同情はあるに相違ないが何も然う底の底まで究めずとものことだ。虚心坦懐只自分の是と信する所を以てそれに對すれば可いのだ、深く絹子の意衷迄付度するには當らぬけれども、自分は絹子の底の底のどん底迄の心が知りたい……………。絹子は事實高村に對して甚麼考を抱いて居るだらう、愛着？ 嫌惡？ 更に見當が付かぬ……………。

自分は是迄高村と、話したことも會つたことも無いから、其如何なる點が絹子の愛を惹くに足り、如何なる點が嫌厭を招くべきであるか、素より推察の下しやうも無いが、左に右、己の所夫として許すからには、何處か可い處があるに相違ない、然し琵琶彈と相曳するやうな品性の男が、能く絹子の心に満足を得るだらうか？ 假や今自分が秘密を守るにしろ、早晚二人は破鏡の嘆きを見るとか、それ程で無いまでも、冷かな家庭の内に絹子は放蕩な所夫を怨んで暮すやうな始末になるのなら、何も自分が茲で遠慮すべき必要も無い、否、寧ろ

隠した方が絹子の幸福であるやうにも思はれる、が、高村との関係が破れた後の絹子は何うなるだらう？ 又新たな所夫を擇んで結婚して、自分との交誼も何日か絶えて……、考へて見ると實に充らぬ！

と、彼は急に嫉妬が出て、絹子の名が書いてある原稿紙の上を滅茶々に塗抹して、其儘バタリと筆を擲つた。

寂しい便り無い思が胸に湧いて来る、折角那まで親しくして居たものを……、と、考へれば考へる程、愈よ充らなさが増して来る、今は最う筆を採る勇氣も

なく、頬杖をついたまゝ、俯いて凝と考へ込んだが、弗と又思ひ出したのは、前夜絹子を訪問した時のことである。

毎も然うだが、夜前も自分が歸らうとした時、絹子は熱心に引留めた、其時の眼色、其時の舉動——自分是一種云ふべからざる嬉しい感情に充たされて歸つたが、考へれば考へる程、那の態度は意味があるらしい、強ち自分の自惚れ

とは思はれぬ、自分と絹子との間には、確かに一脈の情味が通ふて居るやうに

思はれる、自分は、是迄所夫ある絹子に對して、何うしても思ふ儘の情を現はすことが出來ずに居た、……何故勇氣が無かつたらう！ 何故勇氣を出さずに居たらう！

(二十三)

高村と秀香の關係を兎に角絹子に物語る、決心をした浦波は、一日も早く名和家を訪れやうと思ひつゝ、社務の多忙に逐はれて三四日は浮かくと暮して了つた。

今日も正午少し過ぎに出社して、各社の新聞を手當次第に読んで居ると、弗と演藝界投書欄に、秀香女史の噂が載せてあるのが眼に留つて。

扱ては……と思ひながら読んで見ると、果して賣淫の一條、無論茅野の所爲であらう。幸ひ高村の名は白地に出て居なかつたが、慙うなつた以上は、何時

何處で素破抜かれるか分らない、假令自分が云はなくとも他から洩れるに決ま

つて居る。今はもう少し少も猶豫ふべき場合では無い、直ぐにも絹子に會つて、彼の一部始終を話さねばならぬ……。

浦波は社用を托けに直様俵を飛ばして、麻布の宅を訪ねて見ると、二三日前に熱海へ行つて、一週間位は滞留する見込であるといふ、浦波は非常に落膽した急に瘦せるやうな思がした、絹子の跡を追うて、熱海へ行かうとも、考へたが併し今はまだ夫迄に事情切迫の場合ではない。孰れも少し状況を見た其上で歸京を待つ迄の暇が無かつたら、其時行かうと、歸りの俵上で考へた浦波は、秀香女史を訪ねて見ようと思ひ出した。絹子に話すにしても、一應其關係は調査して置く必要がある、寄るに大した廻りでは無し、甚麽様子か、秀香に逢つて探を入れて見やうと、車夫に吩咐けて宮村町なる秀香の宅へと駛らせた。覺え書を持つて來ぬので、家は琴の師匠をしてゐると聞いた外、委しいことは分らなかつたが、それからそれと、漸のことで尋ね當てた。記者の肩書ある名刺を出して案内を請ふと、直ぐ二階の秀香の居間へと通される。

座敷は八疊一間、南と西に窓が開いて、一間の床に同じ押入、火鉢や茶箆筒も程能き位置に据ゑられて、琵琶と並べて長押にかけた三味線は、其昔の紀念でもあらう、別にこれと云ふ目星しい物も無いが、能く片付いて居るのは何様女の住居である。

「さあ何うぞ。」秀香は隅にあつた火鉢を座敷の中央へ持出して、メリンスの座蒲團、浦波に差めながら、愛想よく、

「這麼穢くろしい處へ能うこそ入來しつて下さいました、さあ何うぞお敷き下さい。」

「失敬します。」無造作に蒲團の上に腰を下すと、衣兜から巻蓑を取出して、

「お名前は疾うから伺つて居たのですが、ついお目に懸る機會が無かつのです。實は今日伺つたのは貴女のこと就いて、少し他から聞込んだことがあるものですから、其虚實を確かめたいと思ひまして……。」

「那の妾のことに就いてお聞込のことが……。」不安らしく浦波の顔を瞞めて、

其美くしい眉を纏める。

「然うです、貴女まだ今日の新聞を御覽にならんですな。」

「え、」と、秀香の顔は愈々曇つた。

「實は今日の○○新聞の投書欄に、貴女の噂が載つて居るのです。」

「妾の噂？何う云ふ噂なんで御座います？」

「究り、貴女が最良客に呼ばれて、金に轉んだと云ふやうなことが書いてあるのです。」

「まあ！と呆れたやうに眼を睜つて、「那樣根も葉も無いことを誰が書いたのでせう。」

「多分其新聞の讀者の中に、貴女に對して意恨を抱いて居るものがあるのせう。」

「妾、他人から恨を受けけるやうな、那樣悪いことは爲ないつもりなのですが。」

「そりや然うでせう、併し何も其新聞が、然う云ふことが有つたと書いたのせう。」

は無いのです、只集まつて来る投書を其儘掲げたのに過ぎないのですから……。」

「それにしても、妾が金に轉ぶなんて……幾ら藝人でも、豈か私は那樣……。」

秀香は如何にも悔しさうである。

「否、併し然う云ふ風説の傳はるに就いては、多少の根據があるのです。實は今日伺つたのも其こととして、我々の方にも多少聞込んだこともありますし……。」

「……。」

「匿然として秀香は言葉も出なかつた。」

「究り火の無い處には煙りが立たぬと云ふ諺の通り、假令貴女に那樣ことが無いにした處で、若し多少なりとも他から然う云ふ疑を受けるのは貴女が何か誤解されるやうなことを爲たからではありませんか。」

「私は別に疑を受けるやうな事をした覺はありませんわ。」

「無い！無ければ宜いですが、實は我々も不圖他の方面から貴女の噂を耳にしたので、それが事實であるか何うか、お聞きしたいので……併し何も新聞へ

出すの何のと云ふのでは無いのです、只其事件が少し我々の知人に關係ありま  
すから、云はゞ其實否を知りたいのです……………」

「まあ那樣に妾の噂が世間に廣まつて居るのでせうか。」

「強ち廣まつて居ると云ふ譯でも無いでせう、併し兎に角我々は耳にしたので。」

「甚だことで御座いますか、何うぞお聞かせ下さいまし。」

「浦波はやを膝を進めて我々が聞いたと云ふ其噂は、今お咄した新聞の記事

とは少しく違ふのです、金に轉んだ云々のことも無論耳にしたことは爲たので

すが、我々は貴女の人格を信じてそれは、全く捏造であらうと考へて居ります。」

「何有も私は知らない事なのですから。」と、秀香は口を入れる。

「いや、其點は宜いです、決して御辨解には及ばんです、併し我々は其他に猶

聞いたことがあるので。」

四五日前に茅野から聞いた話しを土臺として、秀香が近來度々茶屋小屋の門を

出入する事、それには何時も若い紳士が同伴する事、其青年紳士は海軍の士官

である事などを手短かに語つて、

「何うです那樣噂があるのです。金に轉んだと云ふ噂も多分それから來たので

せう、……………お心當りもありませんか。」

聞いている裡に、見る／＼秀香の顔には穩かならぬ色が浮いた、で、其話しの終

るのを待兼ねるやうにして居たが。

「まア飛でも無い、誰が那樣ことを言ひ出したのでせう、偽も偽も随分なこと

をまあ……………妾は那樣……………」

「では偽なのですな。」と念を押すやうに云つた。

「え、偽ですとも！」と、秀香はキツパリ云放つて、「一體那樣こと誰からお聞

きなのです。轉んだの轉ばないは別にして、那樣噂をされては、妾本當に困り

ますわ。」

「困る？ちや貴女は金に轉んだと云はれるのは、別段若痛と認めないのですか。」

「若痛でないなんて申しませんわ、それより第一士官の方とかと一緒に茶屋へ



行つたなんて、一寸聞くと本當のやうに思はれて、外聞が悪いぢやアありませんか、有りもしない那樣噂を立てられたら、其方は甚麼に御迷惑なさるゝでせう、根も葉もない事なんですから、何うぞ新聞なんかに出さないやうに爲すつて下さい。」

知らぬ／＼と云ひながら、それと無く高村を庇護ふ秀香の心が浦波の目には顯々と見えた、今は多く追究するの必要を認めない。そこで浦波は優さしく秀香を宥めながら、

「然う心配するには及ばんです、新聞へ出すやうなことは、誓つて無いですから御安心なさい。」

「何うぞ宜しくお願ひします。」と、秀香は哀を乞ふやうに男を見ながら、「本當に藝人位弱いものはありません、ほんの人氣で遣つて居るのですから、一寸とした噂も随分影響しますので。」

「然うでせうとも併し貴女の近來の評判は大したものですな。」

「いゝえ、一向未熟なのですから。」

「然ういふ噂は聞きませんよ、はつく／＼はつ。」

快裕に笑ひながら、何氣なく窓の方を向くと、先き迄南の障子一杯に射して居た日影は、何時か西へ傾いて丁度不當扁三角形を描いて居る、浦波は衣兜から時計を出して見ると、三時十分前。

(二十四)

汽車中で想像した通り絹子が熱海の町へ着いたのは、日金山の彼方に夕日暮き町家の軒にもう散ほら燈火が見えそめた頃である。

絹子は熱海の停車場を出ると煩さく寄集る宿引には目も呉れず、直ぐに俵を備うて芳子が滞在して居る湖風館を目ざして走らせた。

屈り曲つた狭い道を七八町も行くと、左側にある三層樓の大きな建物、門に掲げた丸い瓦斯燈の燈火に、湖風館の三字が映り讀まれる。

俵は勢ひよく其門内に引込まれた。

「お客様」と、叫ぶ車夫の呼び聲に連れて、バタ／＼と二三人の女中が奥から駆出して来る。帳場に居た五十格好の禿頭の番頭も續いて飛出して、匆忙と上り口にあつた古下駄を突掛けると絹子の俵近く進み寄つて車夫の取下ろす旅靴を手早く兩手に受取りながら丁寧に會釈する。

「お早いお着きさまで、嘸ぞ御疲れて御座いませう。静間様の奥様最う朝からお待兼ねで御座います……。」

有繁は商賈柄、早くも二人をそれと推したのであらうと、絹子は驚きやら嬉しさやらに、只もう夢心地となつて、俵を下りるのも忘れた位、暫らくは茫然とした。

荷物と云つた處で、靴二つに行李が一ツ、跡は風呂敷包や蝙蝠傘のやうな手輕なものばかりであるから見る間に車夫と番頭の手運ばれた、絹子は懸てお仲と共に俵を下りて。徐ろに玄關の方へと行く、恰ど其時、芳子は女中の知らせが

あつたので迎ひに来た。

「まあ絹子さん、能く被入しつて下さつたのね。」

芳子はさもなく嬉しさに、玄關の式臺に立つた絹子の傍に、轟とばかり寄添つて、堅く其手を握り締めた。

絹子も堅く握り返して。

「本當に暫らくでしたわね、妾もう何時になつたら逢はれるのかと、思つてましたの、それが不意に貴女から、お手紙でしたらう、妾もう矢も楯も耐らなくなつて、直ぐと家を飛出して來たのよ。」

「然う？お呼び寄せて済みませんでしたのねえ、妾、只もう逢ひたくつて仕方なかつたものですから、つい那麽失禮な手紙を差上げてしまつて……何うぞ勘忍して下さいね。」

「あら、其様こと有仰やつて随分ですわ、妾だつて貴女に逢ひたくつて仕方ないから、それで來たのですわ、何も其様に詫びられる覚えはありませんわ。」

「絹子さん、貴女それ程迄に妾を思つて下さつて……。」と、芳子は凝と絹子の顔を覗めたが、眼には涙が一杯溜まつて、臆て其熱い雫が頬を傳ふて、ほろりと落ちた。

「でも、貴女は妾の只一人の親友ですもの……。」と、今しも奥の方から出て来た女悠う云ひながら絹子は又芳子の手を握と握つたが、何とはなしに胸が一杯になつて、遂には怵へ切れなく、半布で顔を蔽ふて了ふ。

「お座敷のお掃除が済みましたから……。」と、今しも奥の方から出て来た女中は、廊下で泣いて居る二人を訝かし氣に見遣りながら、丁寧に腰を屈めた。

「さあ左も右もお坐敷へ参りましょう。」今迄後に立つて居たお仲は、此時二人の傍近く進み寄りてお嬢様も……貴女様も這處にお立ち遊ばして、宿の手前も御座いますし、悉しいお話は、左に右お座敷へ参つてから遊ばしては……。」

二人は半布で顔を拭きながら、案内の女中を先きに黙つて奥の方へと廊下を歩

む。お仲も其後に跟いた。照返しの洋燈が點火して居る薄暗い廊下を奥深く行くと、突當りに階子段がある、それを登ると右から三室目、海に向つた日當の好きさうな座敷が芳子の室である。一同が其前迄來ると、障子を開けて芳子が一番先きに入る。續いて絹子が入ると、お仲も女中も後に隨ふ。

今まで薄暗かつた八疊の室は、女中が點した洋燈の光りに、隈もなく照らされて、鐵沙塗の壁に木口の新しい柱が目に付く、床に懸つた山水の幅の前には芳子が徒然の手遊びであらう、芽を吹いたばかりの楊柳が活けてある、芳子と絹子は程宜き處に座を取つて、先づ話は東京と熱海の氣候の差異に始つて、それからそれと、一別以來の出來事を、彼一句、是一句と、女中が汲んで出した玉露に喉を濕ほしつゝ、蠶の糸を繰る如くに語り續けたが、女中は既に下へ行き、お仲も荷物のことで帳場へと立つた。二人は愈よ誰憚からず話し合ふ。

「三年と云ふと随分永いやうですけど、經つて見ると本當に早いものですね。」

今はもう全で世帯に燃ぶつて了つて、學校に居た那の時分の元氣つたら、少しも無くなつて了ひましたわ……。」と、芳子は懐舊の情に堪へぬらしい面色で、疑と絹子を見遣りながら、

「貴女なんか未だお一人だから羨ましいことよ、一旦所夫を持つたら女はもう駄目よ、只屋内にはかり固り着きたくなつて仕方ないのね、學生の時代には、彼方此方と出歩くのが只もう面白くつて爲方がなつたのが、近頃は全り變りましたわ、尤も家を明けると自然所夫に不自由をさせるやうになりますので、それやこれもありますが、何うしても因循になつて了つてよ。」

「然うばかりでも無いでせうが……。」と、絹子は優しい眼元に笑みを含ませ、「でも貴女能くそれまでに御辛抱なすつてね、學校に居た時分は、貴女も妾もお轉婆の方では始終一番でしたのに……。」と、且那樣をお持ちになると、女は皆然うなるものでせうか知ら……。」

「然うですな、自然さう云ふ風になり勝ちのものでせうよ。聖書にだつて、所

夫あるものは如何にして其所夫を喜ばせんと、其事を思ひ煩ふなりつて、書いでありますもの、強ち妾ばかりが然うぢやアないのでせう、所天を持つと、雖しも自然所夫の喜ぶやうにとつい其事ばかり考へますからね……。」

「それは然うでせうが第一貴女なんか、御自分の想つて居た方と御一緒になつたのですもの、大事にして上げなくつては嘘ですわ。」

「まあ、絹子さん相變らずお口が悪いのね、何も那樣こと有仰らなくとも宜う御座いますわ、妾それよりか貴女のやうな處女の時代が戀しいのよ、女は猶且處女が花ですわ、處女若し嫁がすして其儘居らば幸なりッて……。」譯は違いますが哥林多の書を見ると、妾はいつもつくづく然う思ひますよ。」

「まあ……。」

絹子は眼を睜つて芳子を見た、何と云ふ變り方であらう。三年前學校を卒業する時迄、芳子は自分と同じやうに、飛んだり跳ねたりのお娯で、演劇が遣りたいたいの女優になりたいのと、大騒ぎをした一味徒黨のその一人である。昔白の

眞似ごとした其口で、今は聖書の何のと、鹿爪らしいことを云ふやうになつた。所夫を持つと、憊うも從順になるものか、田舎へ行くと、憊うも眞面目になるものか、自分は汽車の中で三年越に逢ふ芳子のことを考へた時もう、全然奥様風となつて、昔の面影はあるまいと疑つて見たが、幸ひ其豫想は違つて、眼前見る芳子の舉動に別けても自分に對する打解けた調子は、些少も昔に變つた様子は無いと、絹子は嘸嬉しい。

併し處女と人の妻との差異は見える。昔は萬事己を中心にして動いて居た芳子も、今は其中心が所夫の上にあるやうだ、他から聞く處では芳子夫婦は結婚せぬ前からの戀であるとか云ふ、して見ると、己を捨て、所夫を中心とするやうに成つた芳子の心の消息も讀まれるが、併し芳子は今、聖書の文句を引いて、處女の時代が羨ましいと云つた、自分の戀して居た所夫と同棲しながら、却つて處女か戀しいとは思議である、何故であらう？何の爲めであらう？、自分も行くは高村と云ふ所天に侍づくべき身の上、芳子の現在は、聽て自分の

未來である、其未來よりも現在の方が戀しいとは…………。

或は人知らぬ家庭内の紛紜があつて、那樣事が原ではあるまひか、何れ其内閉いて見やう、絹子は然う思ひながら、此時遠棚の上にある小形金縁の洋冊が眼に止まつた、それが、聖書であるのを知ると、芳子は基督信者になつたのであるまひかと思つた。

話聲が一寸絶えて室が森とすると、波の音が能く聞える、お仲は何うしたのかまだ歸らぬ、

(二十五)

雨や風の日は餘義無く室に閉籠つて居るが、日和さへ住ければ二人は何時も連立つて、來宮神社、梅園、錦浦と、狭い熱海を彼方此方するので、美しく絹子の姿は、疾くも土地の人の目に止り、何時か町中の評判になる位であつた。今朝も二人は早く宿を出て程近い濱邊へと志ざした。眺むれば初島の邊、淡く

一抹、霞を餘して、ほのくと明け放れゆく沖を遙かに、のつと出る朝日影ゆ  
らくと金色の光を波間に漂はせ、藍のやうな水の色にも、何處となく温みを  
包んで、浪の音靜に、夜の帳の宛から、巻き上げらるゝかのやう、心地よき春  
の曉である。

二人は今波打際の低い巖の上に立つた。

絹子が來てからもう一週間の上にもなるが、二人は毎朝のやうに此處へ來る、  
そして曉の海の景色を眺めながら、種々のことを話合ふのだ。

別れてから三年間、其間に起つた舊友の身の上話、見違へるやうに變つて了つ  
た東京の状態、扱ては流行の變遷から、寄席、芝居の近頃の模様などと、絹子  
の話が派手で面白いのに引換へて、芳子は所夫と共に住つて居た四國地方の、  
美しい景色や、奇しい風俗、延いては巳が嫁して以來の經驗談、地味で玄ん  
だ事のみであるが。絹子に取つてはこれも、亦耳新らしく、殊に妻としての經  
驗談は尤も此際趣味を興へる。

行成憇ういふ話になつた。

「貴女も猶旦信者になつたのですね。」

「え、然うよ、今お話したやうに所夫が熱心な信者だものですからね、妾まだ  
能くは分らないのですけど、左に右………と云ふと何だか可笑しいやうですが  
ね、まあ餘義なく入つて了ひましたのよ。」

妾何うも會つた時から然うらしいと思つてゐましたわ、だつて聖書を持つて被  
居るし、それにお話の中にだつて随分聖書の文句を………遣ひになるんですもの………  
………」

「あら、那樣でしたかね、いつも家に居て所夫の話を聞いて居るものですか、  
つい其口眞似をしたのでせう。」

「旦那様は那樣に信仰の堅いお方なのですか。」

「え、堅いの何のつて、お話にならない位なんです、何でも幼い時分から色ん  
な困難に遭つて、中學校へ入る前には、暫らく神戸あたりで、勞働した事があ

るのですつて……それがその時何とか云ふ外國の宣教師に救はれて、今の地位になつたのださうです、だから寧ろ迷信と云ふ位熱心でしてね、一緒になつた當座の間は、然う勧めもしなかつたのですが、終ひには到頭無理強ひに信者に爲せられてしまつたのよ、随分壓制ですわね。」

「けれど、それは善い壓制ですわ、不品行な事なんか爲さるより、何の位宜いか分りませんわ。」

「然うですけど、餘り眞面目でも困りますわ、妾見たやうな爲たら無い者は、それはそれは随分困ることがありますわ、同僚の方なんか来ると毎も、君は堅過ぎて可かんの何のつて申しますの、それでも所夫は濟ましたもので、汝は汝たり我は我たりなんか云つて相手にしないのです。」

「然ういふ方なら結構ぢやありませんか。」

「それでも充りませんわ、隅に可い演劇が掛つても見に行かうでは無し、家内に居つたて冗談一つ云ふのぢやありませんし、妾が道徳性だからであります」

うが、何だか陰氣臭くつて仕方がありませんわ。」

「然うですわね……。」

同情したらしい絹子の口吻に、芳子は愈よ乘氣になつて、

「だから妾これまで随分心細かつてよ、貴女とは遠くに離れて居たし、別にこれと云ふ打融けて話をするやうな人も居なかつたのですからね。」

「貴女それで、處女の時代が戀しいつて、然う有仰るの。」

「あら、別段然うと云ふのぢやありませんわ。けれども寂しい生活をして居ると、つい那樣心も起つて来ますわ、妾、何時も貴女の手紙を讀む度に然う思つてよ。自分は道徳にお婆さんの様に縮まつて居るけれど、貴女は何時も華美な活々とした……思想でも、容姿でも、昔のまゝで、些少も年を加つたやうに見えないだらうと然う思つてましたわ……思つてた通りなんですもの、妾

貴女が羨ましくつづく、自分の身が厭になつて了ひましたわ……。」

「まあ厭な芳子さんね、貴女だつて妾だつて些少も異つて居る所はありません

わ、只、妾はまだ獨身で居るから、自然さう見えるのですわ、妾だつて何時迄  
悠うしても居られませんかからね、然うなれば猶且貴女と同じやうになるでせう。」

「ぢや、貴女も御結婚なさるの……妾も少しも知りませんでしたわ。」

芳子は意外らしく眼を睨つた。

顔を覗かれて、絹子は耻かしさうに俯向きながら、何も然う決つた譯ではあり

ませんけど……。」

「嘘々、嘘よ、隠くして被居るんですわ……宜う御座いますわ、何うせ妾な

んかには話して下さらないのですからね、何うせねえ……。」

絹子は言譯らしく、あら然うぢやアなくてよ、全くまだ決つて居るのぢや無い

のですもの。」

「それでも左に右、那樣お話があるのでせう。」

「それは……。」と、絹子は言ひ流む。

「駄目よ、絹子さん、いくら隠さうと思つたつて、妾聞かすには置きませんよ、

有るんでせう、えッ、有るんでせう。」

「それは、両親の方では、那樣話もあるやうですけれど……。」

「ぢや貴女は知らないと有仰るの。」

「然う云ふ譯でもありませんけど……。」

「知つてるのでせう！えッ然うでせう。」と、芳子は愈よ云ひ迫る。

「ぢや話しますよ、だけど此處では人が来るから、最度彼方の殿の方へ行きま

せう。」

二人は立つて居た巖を下りて、波打際を魚見崎の方へと歩き出す。

空は晴れ渡りながら、日はドンヨリと霧んで、灰色に乾いた砂地の上に、薄く

二人の影法師を映した。

沖を見ると何時の間にか初島のおたりに三四艘の漁船が浮んで居る、水天一髪  
の彼方、遠く薄墨の如き大島の影を切つて、横に刷いた一條の煤烟は、下田行  
の汽船でもあらう、二人は又立止つて、小手を翳しながら、凝と其景色を眺め



て居た。

(二十六)

波打際の湿りを帯びた沙の上を、新らしい對の草履の足も軽く、絹子と芳子とは話に氣を奪られながら、歩むとも無く辿り辿りつて、何時か漁夫の小舎近くまで来た。

「まあ這麼遠くへ来て了つてよ」と。芳子は立止まつて、今来た方を振り返る。日はもう空高く、人家の邊にちらちらと燃える陽炎が見える。熱海は一月でさへ足袋が要らぬ程温い土地であるから、薄綿の重着をした二人は、稍熱いくらゐである。

絹子は帯の間から、小形の懐中時計を出して見て、

「もう九時十分前よ、今日は随分永く散歩しましたのね。」

「然うね。」と、芳子は笑を含んだ眼で絹子を見たが、

「絹子さん、先刻のお話しは何うして……………」

「あ、さうく」と、絹子は頷いたが、

「だけど、まだ悠々と決つた事ではないのですから……………」

前と同じやうな事を繰返して、絹子は汗ばんだ頬のあたりを手巾で拭ひながら、元来た道を眺めた時、急ぎ足に駆けて来る女の姿が目に入った。

「仲ぢやないか知ら……………」

「然うく女中さんの様ですね。」

二人が瞳を凝らして一心に眺めて居る内、女の姿は見るく近寄つて来る。

「あ、仲だ、猶旦仲だ……………那麼に急いで来て、何うしたと云ふのでせう。」

「何か急用でも出来たのぢや無くつて……………」

「然うですね……………」

二人の考へる暇も無く、早傍近くまで歩み寄つた、お仲は、苦しさに息をはずませながら、

「まあお二人とも這處どころに居らしたのですか随分お探し申ました、」  
「何うしたの、何か用件でも出来て？」と、絹子は不安らしい眼使ひしてお仲  
を見る。

「否、別に大した御用でも無かつたのですけれど……。」と、お仲は上氣して  
赤くなつた其顔を、幾度も拭つて、只今東京からお手紙が着きましたのですが、  
何か至急と書いてありますので……。」

帯の間へ二つに折つて挟んだ一通の封書を絹子に渡す……。」  
差出人の名を見る迄も無く、浦波の筆蹟である。

「至急と云つて共産ことなのだらう？」  
訝かしげに一寸小首を傾けたが、其儘封を破つて、讀出す。芳子とお仲は心配  
らしい眼附をして一心に絹子の顔を覗めて居る。と、細字で随分と長く書いて  
ある其手紙を讀んで居る絹子の面に、穏かならぬ色が浮いて、持つた其手に慄  
が見えた。

「何か御心配なことでも……。」と、讀終るのを持ちかねて芳子は聞く。

「いゝえ、心配と云ふ程のこともありませんが……。」手紙を元の封筒に納め  
ながら、去り氣なく答へたが、今迄の様子と變つて居る。

「御心配ごとちやなくつて……。」と、芳子は、絹子の顔と手紙とを、交互り  
に見比べながら、「え、絹子さん、然うちやなくつて……。」

「いゝえ」稍氣を取り直したらしく、態とであらうが笑顔になつて、  
「其様に心配することぢアないのよ。」

「然う？ だけど全く何でも無いことよ。」

慇う思ひながら又俯いて稍しばし思案に耽つたが、何か思い立つた事でもある  
のか、急に

「芳子さん、妾一寸東京へ行つて来ようと思ひますわ。」  
「まあ突然に其様こと有仰つて……。」と眼を圓くする。

「お歸京になるのですか」お仲も恐る恐る後の方から口を出した。

「歸るのぢやないの、一寸行つて来るばかりなのよ。」

「然うしますと……」お仲の云ひかける傍から芳子が、

「絹子さん、貴女何うして急に那樣ことをお考へになつたの？、猶旦お手紙のことからせう！」

「いえ。」

「ぢや、何ういふ譯で急に歸らうと有仰るの、何か面白く無いことでもありましたの……。」

「其様ことは決して無いのよ、だから妾、先刻から又歸つて来るつて、然う云つてるぢやありませんか。」

「ぢや何うして一旦お歸りになるの……。」

「其譯？」當惑氣に芳子の顔を打成つて

「其譯はね、今お話出来ませんのよ、いづれ歸つて来てから……明日にも歸

つて來ますからね……。」

「まあ、では今日……立ちなされるの？」

「えい、成るだけ早い方が宜いと思ひますから」

「本當にお立ちなされるんですか。」お仲は又心配さうに口を出す。

「あゝ、たけどお前は此地で待つて居てお呉れ、妾一人で行つて來るからね」

「お一人で？」と驚いて「何うしてもお立ちならば、私も御一緒に参ります」

「いえ、お前なんか來ない方が宜いのよ。」

「それでもお伴致しませんと、家へ歸つて奥様に叱られますから……。」

「宜いのよ、妾が然う云ふのだから宜いのよ。それにお前迄行つて了つたら、

芳子さんが、お一人になつて急に淋しくおなりだから……。」

「絹子さん、妾なんかは何うでも宜いのよ」

「それで、貴女……妾只、一寸行つて來ればそれで宜いのですから、何もお仲を伴れる必要は無いのですもの」

「それは然うかも知れませんが……」

芳子は憊う云ひかけて、弗と漁師小屋の方を眺めると、魚籠を背負つた三四人の若い男が、何やら高聲に咄しながら、此方へ向かつて来る。

「人が来ますから……左も右、宿へ歸つて悠りお話しませう。」

「それが宜しう御座います。」と、お仲も賛成する。

漁師達は早くも三人の背後に迫つた。

「さあ早く参りませう。」

無遠慮な笑聲が後に起つて、聞くも忌はしい事を言初める、三人は後をも見ずに駆出した。

(二十七)

何うかして絹子の出發を延ばさせやうと、芳子とお仲とは色々に説いて見たが、絹子は最初の決心を翻へさぬので、二人も餘義なくそれに従ひ、少し早目に晝

食をしたゝめて、直ぐ其用意に取掛つた。停車場迄は大した道程でもなし、それに、これぞと云ふ荷物も無いから歩く事にして、三人一緒に旅舎を出た。停車場へ着くと、折能くも今發車しやうといふ時なので、絹子は挨拶も夕々にして乗移る。

「直ぐ歸つて来ますからね……」

發車相圖の笛が鳴つて、人車はノロノロと鐵路の上を人に押されて行つたが、間も無く其人が車の後へ乗ると、道は下りになつて急に走り出す。

芳子とお仲は停車場の構内に俯んで、車の影が彼方の藪蒼とした木立に隠れる迄見送つて居たが、懸て踵を返して、元來た路を話し話し歸つて行く。

「ねえ、貴女、那麼に突然にお立ちなされるなんて、お嬢様は一体、何うなすつたのでせうね」と、お仲が芳子に聞く。

「さあ何うしたのでせうね、絹子さんは些少も其譯を咄さないのですからね、妾なんか薩張分らないのよ、お仲さんにも心當りが有りませぬの？」

「心當りつて別に……」

「那の手紙は一體誰方からなんです……」

「那れですか？ 那れは浦波さんと云ふお友達の方からのです」

「お友達？」 芳子は怪訝な顔で、

「だつて男のやうな書き振でしたか……」

「え、男の方なので、私も能くは存じませんが、何でも新聞記者だとか聞いて居ります」

「新聞記者！ まア絹子さんは何うして其様方と 知合になつてるのでせう」

「委しいことは存じませんが、能くお話しにいらつしやるので御座います。」

「まあ其様に悪意なお方なの？」 と、芳子は眼を睜つてお仲を見たが、其瞬間にゆくりなくも思出したのは、先き濱邊で、絹子自身から、それとなく喚はされた結婚の一條である。

絹子がそれを避けるので、立入つて委しいことを聞く暇も無かつたが、其浦波と云ふ男か、或は絹子の所夫たるべき人では無かろうか、然うだ、然うに違いない！

お仲は芳子が遺慮考を抱いて居やうとは知ら無い、で、芳子か二人の間に疑を挟んだものと思ひて言譯がましく

「え、随分お近かしくして被居るやうですが、只ほんのお友達なので……」

……男の方のお友達は外にも随分お有りなさるやうで御座います。」

「ぢや、別に憚うと云ふやうな御關係の方ぢやなくつて……」

「憚うと申しますと……」

「絹子さんは其お方と御一緒になると云ふやうな譯ぢやないんですか」

「其様ことは決して有りません、お嬢様にはもうちやんとしたお婚様がお有りなので御座います。」

「その手紙のお方が然うぢや無かつたのですか？」

「違ひますの、お嬢様は海軍の方なので……。」  
「然う！ 妾些とも知りませんでしたわ、絹子さん隠してゐて、妙しもお話なさらないから……。」

「それでは、まだ御存知なかつたので御座いますか」

「え、然うなの、お仲さん知つておいでなら、聞かして頂戴ね」

「私も能くは存じませんけど……。」

高村の経歴、地位、風采から、二人の間には既に公然の約束が成立してゐる事、目下出張中の長崎から歸京次第、間もなく式を擧げる筈の事など、自分が知るだけをお仲は物語る。

「まあ然うなんですか？」と、芳子は吃驚したやうな顔をしたが、「然うとする」と、絹子さんが其浦波と云ふ方と親しくして居るのは分らないぢやありませんか」

「否、お嬢様は那した御氣性ですから、其様ことは餘り御頓着なさらぬ方で

御座います。現に他にも遊びにお出での方もありますが、お嬢様は今申した浦波さんと云ふお方が、一番お氣に召して居らつしやるやうで……。」

「本當なんですか？」と

絹子と浦波との關係を芳子は想像して見た、昨日來た其手紙の内容は、これと云つて別に推測することも出来ぬけれど、手紙を讀んだ折の絹子の様子、それから急に東京すると云ひ出した前後の模様、それやこれやを考合すと、何うやら二人の間に、秘密の事情が——妙くとも親友としての自分迄に包むべき程の秘密がある、那した發明な名和さんの事だから、他から非難を受けるやうな次第はあるまいが、假りにも定まる人のある身としては、爲方が不穩當ではあるまいか、歸つたら自分は他く迄も訊問して、若し心得違ひのことでもあるなら、是非反省を求めやう、が、其様ことは無論あるまい、無いに決つて居る、併し若しも有つたらば……。」

基督は牧羊者の譬を引いて、神は道心堅固なる九十九人の者よりも、不信仰なる只一人を可愛がられると教へられた。

名和さんは自分の友達中の只一人である、それが迷ふのを何うして黙つて見て居られやう、何處までも救はねばならぬ、飽くまでも盡さねばならぬ、と芳子は深く決心したが、氣がついてお仲の方を見向くと、これも何か考へて居るらしく俯いた儂歩いて居る。二人は無言で蹊躑と道を急いだ。

(二十八)

今朝大垣發の上り列車は、五時を過ぐることに四十分、今國府津停車場に着いた。プラットホームには幾十の乗客が佇んで居て、互に待兼ねたやうに、ドヤ／＼と押寄せたが、車室の何處も彼處もギッシリで血氣な男達は何うか恁うか乗完せたものゝ、年寄や婦人の客は戸惑ひして、プラットホームを彼方此方と小迷うて居る。

此時二等室の窓から煙草を買つて居た年若い洋装の紳士がある、制服こそ纏うて居らぬか、それは造船士官の高村辰夫で、彼は緊急用件の爲め、電報で呼び戻され、今しも其歸京の途中である。

で、彼は首を差出したまゝ窓外を眺めて居たが、急に驚きの目を睜つて、「絹子さん、絹子さん」と、慌だしげに聲をかけた。

絹子は高村の姿を見て驚いた。

「まあ。」と云つたきり、暫らくは言葉も無かつたが、懸て其車窓の下に倚り添つて、

「妾些ともお歸りの事を存じませんでしたわ」

「急に電報で呼び戻されたので、實は僕自身も、全然知らなかつたのですからね」

「五月迄は逆もお歸りに成れないこと、思つておりましたわ」  
「全く思も寄らんことでした。併し僕より、貴女は何うして這處へお出掛で

した？お一人なんですか……」

此時乗客はもう大底乗つて了つて、残つて居るのは絹子の外に、後れて駈付け  
た二三人があるばかり。發車はもう間近に逼つて居た。

「何うぞお早く……」と、通掛りの車掌が絹子に注意したので、高村が、

「まあ左に右お乗りになつたら宜いでせう、恰ど席も空いて居ますから……」

……」

「では御一緒に参りませう。」

急いで室内へ入ると、高村の筋違ひの席に坐を占めた。

もう洋燈が點つて居る。

間もなく汽車はプラットホームを離れて、次第に速度が加はり出す。

「何處へ……」と高村は巻簾に火を付けながら、「道廢に遅く……お一人で  
何處へ行らしたのです。」

「妾、一週間ばかり前、仲をつれて熱海の友達の處へ参つたのですが……」

伏目勝ちに答ふる絹子の横顔を、高村は熱く石遣つて、

「熱海！然うでしたか、それは宜い保養をなさいましたな、定めし面白いこと  
が澤山あつたでせう……」

「何う致しまして……些とも……」と、絹子は更に浮き立たぬ。

「併し熱海は時候が好いさうですし、氣色も嘘ぞ可いでせう。」

今迄一人旅の寂しさに堪兼ねて居た高村は、能き話相手を得たのを喜ばしく、  
道中の見聞などそこはかとなく物語つて、何時にない多辨を弄した。

併し絹子は、俯いたまゝほんの應答の外は餘り口を利かなかつた。初めの内こ

そ高村も氣付ずに居たが、段々話して居る内に、絹子が何うやら自分と話すの

を、好まぬらしい態度も見える、自分の氣の所爲では無からうかと、高村は幾

度も打消して見たもの、何うも疑が事實らしい、絹子は何を那樣に不快に思

つてるのだらう？

自分が東京を出發してから今日迄は、僅か二十日にも足らぬ日數である、その



二十日前、自分が出発する前夜絹子は態々自分を尋ねて呉れた、其時自分は何時にもない絹子の美くしさを感した、温かい心を感じた、汽車に乗つても、宿へ着いても、毎も絹子の姿が目前へ隠見いて、何となく心が騒がれ、永い二ヶ月の滞在は實際苦痛であつた、それが突然歸京の命を受けて喜んだ揚句、しかも車中で其戀しいと思つて居た絹子を見たのだ、自分は譬へ難ない悦喜と満足とを感じて居る。それなのに絹子は何と思つて居るのが、別に嬉しいやうな顔も見せない處が僻みかは知れぬが、何うやら不愉快らしくも見受けられる、何故笑顔を見せないのだらう、何故晴々として話さないのだらう……或は何處か身體の調子でも悪いのか知らず、然う思ふと顔色の勝れぬ處は病氣らしくもある。去り氣なくは云ふものゝ、熱海へ行つたのも或は病の爲なのか、それにしては供も連れぬ一人歩きが不思議である……

高村は立て続けに巻簾を揺らしながら、解けぬ疑問に胸を痛めてゐたが、絹子の蒼い顔は愈々蒼味を加へて、曾て出發の前夜、高村を訪づれた時の様とは全

で違ふた花やかな笑顔、優さしい聲音、高村が絶えず胸に描いて居た其幻の絹子は、今現に彼の前に居りながら、過ぎた日に變る其態度の待ち焦がれて居ただけに其失望も夥しい。併し高村は敢て追究がましい事は言はなかつた。彼は寒いのも厭はず車窓から首を差出して、暮行く田家の景色など眺めながら、急に歸京を命せられた其事情などを想像して見たが、何時か心は絹子の事に移つて了ふ。

二宮、大磯、平塚と、汽車の進むに連れて、窓外は漸く小暗くなつて、春とは云へ未だ寒い夕風が、身に沁むやうに頂を襲ふ。高村も今は耐らなく首を引込める。

汽車は今凄じい響を傳へて、相模川の鐵橋に懸つた。

二十九

浦波は新聞社の方に少し暇が出来たのを幸ひ、今日鎌倉に居る友人を久し振で

訪ねたが、つい話し込んで了まつて思の外歸りが遅くなり、友人に送られて其家を出たのは六時少し過ぎ、日は最うとツぶりと暮れて居た。

毎日は三等に乗るのであるか、友人が好意にも青切符を買つてくれたので、今日は二等に乗つた。

鎌倉を發車したが、六時三十五分、大船までは十分も費らなかつた。浦波は橋を越えて、寒い吹きさらしのプラットホームを彼方此方と歩いて居たが、懸て上り列車は着いたので、浦波は終の方の一室に入る。

室内には十七八名の乗客が居る、浦波は隅の方から順々に、其一人々々の顔を見て行つたが、不圓眼を轉じて中央の處に至ると、絹子に能く似た女が居る。

「おや？」と、小首を傾げて熟視すると、それが間違もない絹子なので、蹠々と其傍へ進寄り、會釋を軽く、

「絹子さん、お歸りで御座いましたか。」

「は。」俯いて居た絹子は、吃驚して顔を上げたが、更に猶驚いた。

國府津で高村に會ふたのさへ意外なのに、又此處で浦波に逢はうとは……、絹子は餘りのことに啞然として、暫くは口も利けなかつたのである。

「手紙を御覽下さいまして……。」と、男は和々しながら、

「實は私、熱海まで参らうかと思つたのですが、色々社の方都合もありますし、それに男一人でお訪ねするのも何うかと存じましたので……。」

絹子と並んだ乗客は、氣を利かして退いて呉れたので、浦波は禮を述べて其處へ腰懸ける。

高村に氣を兼ねるらしい絹子は、小聲に、

「何うも色々御心配を願ひまして、難有う御座います。」

「いゝや……併し左に右、私から参上げた那の手紙は、御一覽下さつたのでせうな」

「拜見致しました。實は其事で色々伺びたいことや、御相談申したいこともありましたので……。」

「いや、然うでしたか、私の方に及ぶことでしたら何なりと御相談に乗りませう。」

「難有う何うぞ宜しく願ひます」と首を下げる。

先刻からそれとなく二人の様子に注意して居た高村は、不快な顔付をしてシロく二人を見て居たが、絹子が此方を見た眼とパツタリ合つたので、絹子は下を向く。高村は直ぐ又窓の方に顔を背向けた。

未来の所夫が傍に居やうとは夢にも知らず、浦波は唯絹子と同室に乗合せた幸ひを喜んで、無上に氣を逸ませながら、

「熱海の方は如何でした、何か面白い土産話でもありませんか、えッ、何うですな、何か斬新なことでも……」

「何もありません」と、俯いたまゝ、顔も上げぬ。

「無い！」顔を覗くやうにして、「私も二三年前一度行つたことがありますかな、彼處の人車には實に弱らせうれましてね……」

云ひ懸けて浦波は急に思ひ出したらしく、

「あッ、然う〜御宅で伺つた時には、女中さんをお伴れなすつたやうに聞いて居りましたが……」

「え、伴れて参りましたのです」

「何うなさいました？先へお返しになりましたか？」

「いゝえ。」

「ぢやお残しになつたのですな」と、獨で頷く。

「しますと、又近い内にお出向きになるのですか？」

「え、」絹子は唯最う迷惑さうである。

「と、お目に懸れるのも、又暫らくの間ですな、何うも私、近來貴女が御不在なので何となく物寂しいやうでしてね……」

洋服の衣兜から浦波は巻蓑を取出す。

汽車は何時か、もう戸塚と大船の間くらゐまで進行した

浦波が莫喫ふ間を、絹子は俯きながら様々のことを考へた。自分は浦波の手紙に依つて、高村と秀香との關係の概畧は心得て居る、何も嫉妬を燃やすのでは無いが、自分と云ふ約束した女がありながら、賤しい女と惡意にして居る高村は何ういふ心なのだらう？、自分は是迄高村の學者らしい態度に、非常な尊敬を拂つて居た、決して女色に耽るやうな那樣男では無いとばかり信じて居た。それが浦波の手紙によると、賤しい琵琶彈きの女と親しくなつて居ると云ふ！何と云ふ淺ましいとであらう最う自分が高村に對する尊敬は、以前の十分一にも二十分一にも成つた。今憐うして突然會つて見ると、相變らず卒直らしい姿ではあるが、何も知らぬ前こそ好ましくも思へ、醜い心を掩ひ裝つてゐる、仮面なのかと考へると、只もう腹が立つ！話をするのさへ氣持が悪い！自分はこれから歸京して秀香との關係を調べた上、愈よ事實と分れば唯黙つておめく、と高村の妻になることは出来ぬ、場合に依れば破約する迄の覺悟を持つて居る。けれど假りにも未來の所夫である其人の前で、他の男と無遠慮に言葉を交はす

のは、自分として實に心苦しい。で、絹子は早く二人を紹介して、高村には疑を殘させぬやう、浦波には後で顔をば赤かく爲せぬやう、と思ひ焦かれたが、何となく言出苦く、時々高村の方を見ると、男が直ぐ横を向くので、到頭其機會も得ずに了つた。追めて浦波が話懸けずに居てくれ、はと、絹子は心に念じたが、何も知らぬ浦波は、四邊介はずと話をする。絹子は一刻も早く新橋へ着きたいと祈つて居た。

## (三十)

高村が歸京後三日ばかり過ぎた或夜、例の水田大佐は晩酌の微碎機嫌で、不意に高村の下宿を訪つた。憐うした突然の訪問は、大佐が何時もの癖であるが、歸京後折悪しく懸違つて未だ合はなかつた高村は、宿の主婦に吩咐け、酒肴の用意などして大佐を饗應しながら、急に歸京を命ぜられたことから、引續き公用多端の次第を物語り、其